主体的学修を促す

産学協働教育プログラム

ハンドブック

京都産業大学
KYOTO SANGYO UNIVERSITY

新潟大學

成城大学

FIT Fukuoka Institute of Technology 福岡工業大学

平成 24 年度 文部科学省 大学間連携共同教育推進事業
「産学協働教育による主体的学修の確立と中核的・中堅職業人の育成」

目次　Contents

■はじめに ・・ 2

■産学協働教育で目指す学修成果（アウトカム） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4

■学修成果（アウトカム）を用いたルーブリック評価表 ・・・・・・・・・・・・・ 6

＜共同開発プログラム概要＞

■「主体的学修を促す産学協働教育プログラム」全体の構成 ・・・・・・ 10

■授業案1
はじめての「キャリアデザイン」 –これまで・今・これから–
（成城大学） ・・ 12

■授業案2
「協働による学び」のための基礎力づくり
（福岡工業大学） ・・・ 16

■授業案3
企業の課題探究と大学での学びに共通する「問題への取組み方」を考える
（新潟大学） ・・ 20

■授業案4
大学教育を通じて社会での実践力を育成する
（京都産業大学） ・・・ 24

■合宿形式でのプログラム展開例 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 28

＜評価手法＞

■評価システムの全体像 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 34

■学修成果の評価手法1　ールーブリック評価ー ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 35

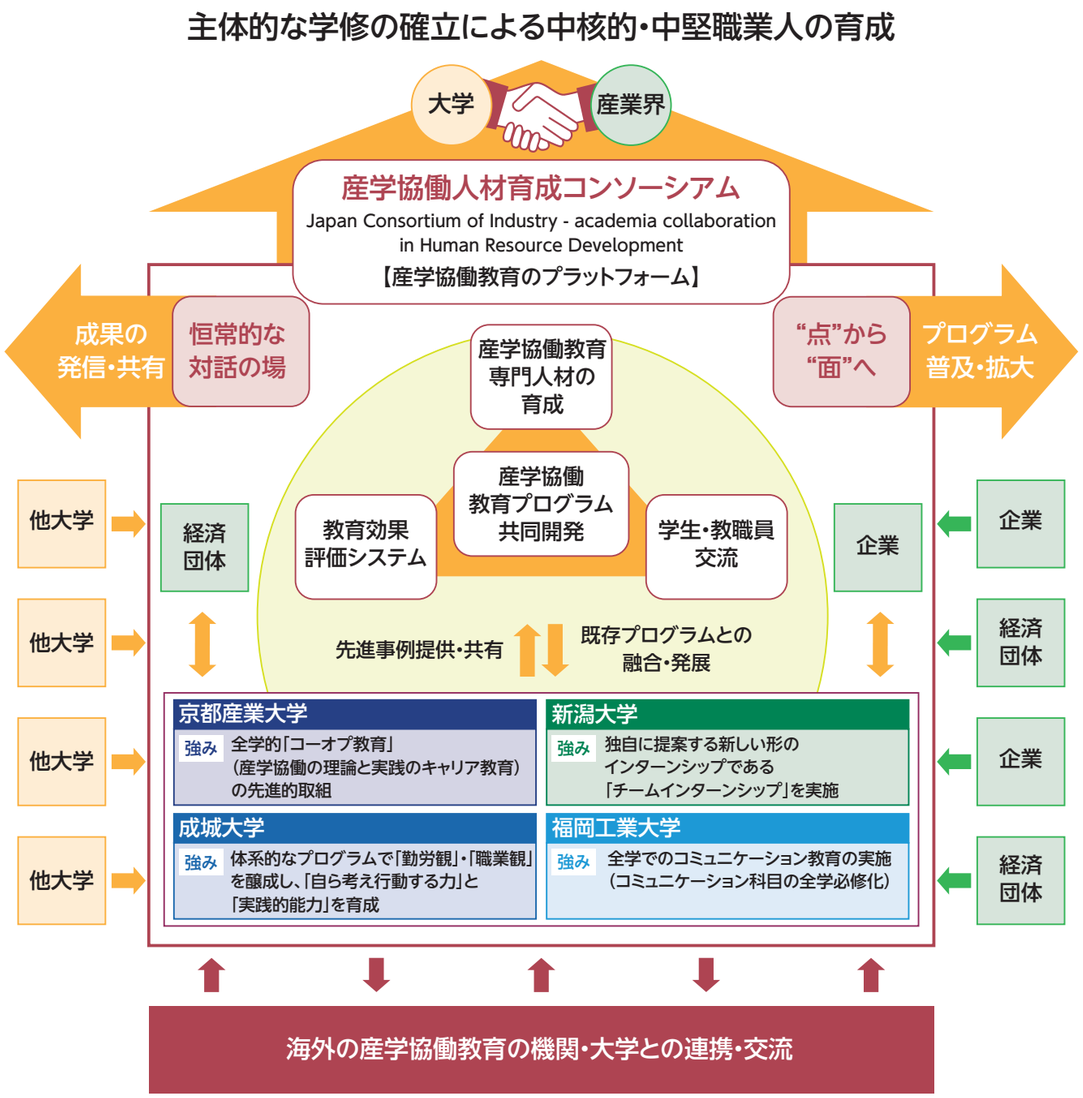
■学修成果の評価手法2　ー学修実態調査ー ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 36

■プログラム評価の手法　ー相互フィードバックー ・・・・・・・・・・・・・・ 40

はじめに

本取組「産学協働教育による主体的学修の確立と中核的・中堅職業人の育成」の目的は、「産学協働教育」を始点として学士課程教育の質的転換を図り、学生の主体的な学修を促し、「地域社会の発展を担う中核的・中堅職業人」を育成・輩出することである。

【参考】本取組における「地域社会の発展を担う中核的・中堅職業人」の定義
エリート的グローバルリーダーとしての役割を主に担うのではなく、日本の社会及び企業・組織において中核的・中堅的な役割を主に担い、堅実に支えていくグローバルな視点を持って活躍する人材。



現在、「主体的学修」は、大学教育においてキーワードである。本取組では、「主体的学修」を促す１つの始点が「産学協働教育」にあると考える。今日の多様化した学生の主体的な学修への動機づけは、学問的知的好奇心だけでは限界がある。「なぜこの勉強をする必要があるのか?」「今の学修が将来、社会でどのように役立つのか、繋がっていくのか?」という大学教育と社会との関連（レリバンス）を明示することで、大学教育で獲得する知識の有用性を実感させ、学生を主体的な学修に向かわせることが可能になるであろう。

この目的を達成するには、学生を主体的な学修へと動機づけるための大学教育と社会とのレリバンスが内包された産学が協働する教育プログラムの構築が求められる。

本取組が採択された理由としては、「申請された分野にかかる実績が卓越している４大学による連携であり、理論的背景や目的、育成する人材像等が明確化されている」と高く評価された。

京都産業大学、新潟大学、成城大学、福岡工業大学が個々に開発した教育手法や成果の共有化と蓄積化の相乗効果によって、質の高い産学協働教育プログラムを構築することが可能となった。異なる設置形態と所在地ゆえ、地域ニーズや学生気質も異なる４大学が連携することにより、地域差や規模等の違いを超越し、多くの大学に普遍に有効となるプログラムを構築でき、単独では実現できない教育プログラムの進化や多様化につながることであろう。

本ハンドブックは、その成果集である。４大学がそれぞれに実践しているプログラムの強みを持ち寄ったものである。ただし、４大学の強みを凝縮して持ち寄ったため、全体として体系だったプログラムになっているとは言い難い面はある。しかし、無理に体系づけることによって、各大学の尖った“ゴツゴツした部分”が失われてしまうことを避けるため、あえて、各大学の強みである“ゴツゴツした部分”を生かすことにした。

わが国においてインターンシップ・PBL といった産学協働教育は、今後ますます拡大を見せるであろう。多くの大学で取組が増えていくなかで、本ハンドブックがその一助となれば幸いである。

本ハンドブック、ひいては４大学の取組、本事業それ自体が対象になるであろうが、率直なご意見、ご批判をいただきたい。それをプログラムの向上に繋げ、その成果をさらに還元して、結果としてわが国の産学協働教育の質的向上に繋がるという好循環が生み出せることを願っている。

産学協働教育で目指す学修成果（アウトカム）

項目策定までのプロセス

本取組では「産学協働教育」を始点として大学教育と社会との関連（レリバンス）を明示することで、学生の「主体的学修」を動機づけ、促進していくことを目指している。この「産学協働教育」と学生の「主体的学修」との間をつなぐために効果的なプログラムを構築し、またその達成度を評価していくためには、そこで期待される学修成果（アウトカム）を整理し、言語化することが必要である。それはすなわち、何が出来るようになることが主体的学習者としての成熟を示すのかを明らかにすることである。また産学協働教育で期待される学修成果を明示することによって、既存のカリキュラムの中にそれをどう位置づけるか検討することも容易になるだろう。

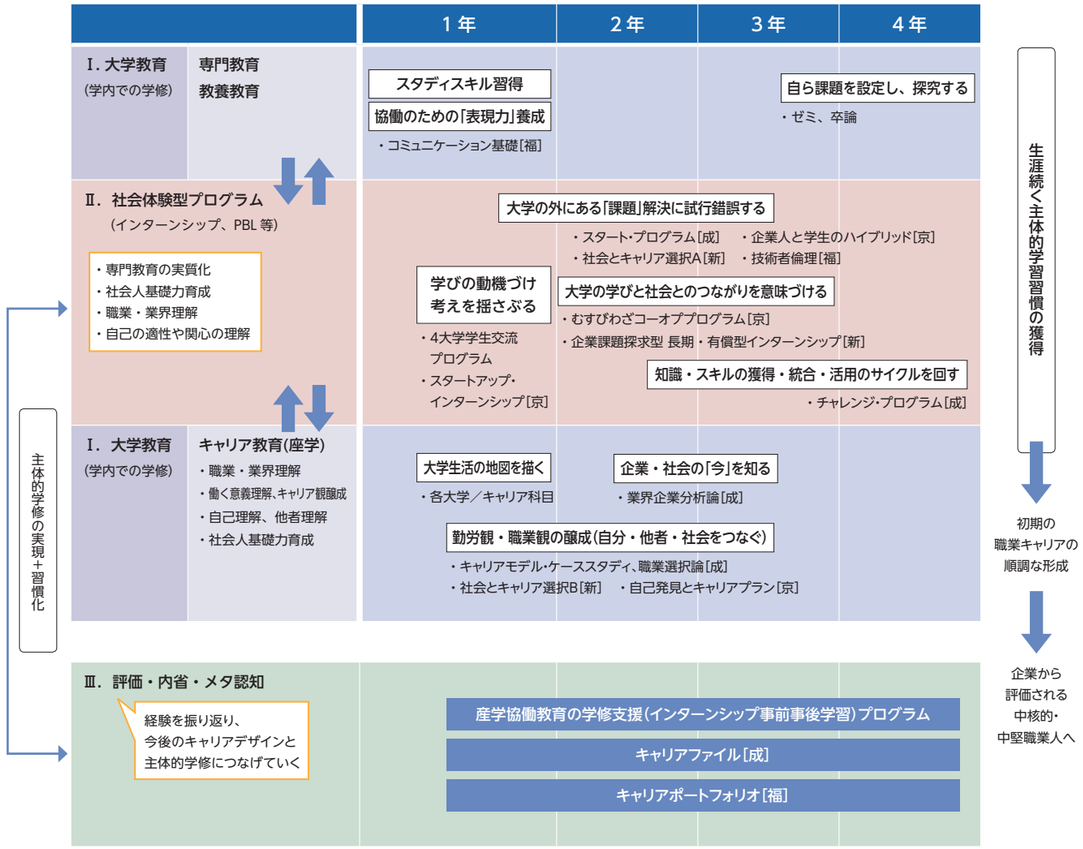
策定にあたっては、まず4大学で実施している先進的なインターンシップや産学協働の授業プログラムを集約し、それらの特徴や到達目標、対象学年等を整理した。それを集約して学年別の展開をマッピングしたものが、下表の「産学協働教育プログラムマップ」である。

そして、それぞれのプログラムを実施している各大学教員の知見を持ち寄って議論を重ね、専門分野の枠にとらわれない汎用的な学修成果として挙げられるもの、主体的な学修習慣の確立に寄与するものを抽出していった。その過程では、海外で先進的なコーオプ教育を体系的に展開しているノースイースタン大学のラーニングアウトカムも参考とした。

そうした作業から集約された項目を、各大学が協働する企業・経済団体・行政等のステークホルダーが集まる場で議論し、検討を重ね、最終的にまとめたものが右頁に示す８項目である。

産学協働教育プログラムマップ

学修成果（アウトカム）策定の前段として作成



［京］＝京都産業大学、［新］＝新潟大学、［成］＝成城大学、［福］＝福岡工業大学

産学協働教育で目指す学修成果（アウトカム）

1	社会で求められる力の理解	社会で力を発揮できるレベルと自身の現状のレベルを的確に把握している
2	大学での学びと社会との関連づけ	自身の学びを適切に評価し、大学での学びが社会でどのように役立つか意味づけられる
3	課題解決プロセスの実践	未知の課題に取組むために、知識・スキルの獲得・統合・活用のサイクルを回すことができる
4	自己成長のための行動	自らの成長に対して目標を設定し、行動計画をたててコミットメントできる
5	学び・経験への意欲	キャリア形成に対する自分の考え方を明確に意識し、今後の新たな学びや経験への意欲をもっている
6	変化する社会への関心	変化する社会の動向に広く関心を持ち、情報を収集することができる
7	学習環境の設定	必要とする学びに適した学習方法・環境を自分で選びとることができる
8	他者との協働	他者と協働して成果につなげるための方法や考え方を知り、自分の役割・責任を果たすことができる

学修成果（アウトカム）を用いたルーブリック評価表

本ルーブリックは、産学協働教育を通じて目指す8つの学修成果（アウトカム）について、①学生がそのプロセスを含めてより良く理解するため、及び②プログラム設計者や実施者が指針を明確化したり具体化するために活用できるツールとして作成した。8つの観点、5つのレベルで構成されており、「5」は「習慣化・継続的にできている」レベル、「4」は「実行・活用できる」レベル、「3」は「なぜか分かる・取組んでいる・行動しようとしている」レベル、「2」は「知っている・関心がある・考えたことがある」レベル、「1」は「2に満たない」レベルとして整理した。なお、本ルーブリックの活用にあたっては、プログラムや科目に即した形で観点を選択すること、対象に応じて言葉の意味を説明・解説して実施することが必要である。

No.	レベル／観点	5 習慣化・継続的にできているレベル	4 実行・活用できるレベル	3 なぜか分かる・取組んでいる・行動しようとしているレベル	2 知っている・関心がある・考えたことがあるレベル	1 「2」未満	評定値 ＜1～5で判定＞
1	社会で求められる力の理解	社会で求められる知識やスキルに対して、自分の現在の力のレベルがどのくらいなのかを、実体験に基づいて的確に評価・把握している	社会で求められる知識やスキルに対して、自分の現在の力のレベルがどのくらいなのかを、自分なりに評価・把握できる	社会で求められる知識やスキルに対して、自分の現在の力のレベルがどのくらいなのかを理解しようとしている	社会で求められる知識やスキルがどのようなものか考えたことがある	左記に達しない	
2	大学での学びと社会との関連づけ	大学での学びを社会で活かしたり、社会での経験を大学での学びに関連づけたりしながら、継続的に学びを深めている	大学での学びを社会でどのように活かせるのかについて、自分なりに意味づけたり関連づけたりできる	大学での学びが社会でどう役立つかについて、自分なりに理解している	大学での学びの意義や意味について考えたことがある	左記に達しない	
3	課題解決プロセスの実践	大学や社会で、必要に応じて知識やスキルを獲得したり活用しながら、日々の課題解決に取組んでいる	大学や社会で、知識やスキルを活用しながら課題解決に取組むことができる	課題を見出し解決することの必要性や重要性について自分なりに理解している	課題を見出し解決することの必要性や重要性について考えたことがある	左記に達しない	
4	自己成長のための行動	自分が成長するための行動パタンやプロセスについて理解し、実践と内省を繰り返しながら、継続的に自己改善している	自分が成長するための行動パタンやプロセスについて理解し、実践と内省を繰り返しながら自己改善できる	これまでの経験をふまえ、自分が成長するための行動パタンやプロセスについて理解している	自分がどのように成長してきたか、また今後どのように成長していくかについて考えたことがある	左記に達しない	
5	学び・経験への意欲	自分にとって困難な経験を通じて学ぶことの重要性を理解し、そうした学びの機会を自ら見出し取組むことを習慣化している	自分にとって困難な経験を通じて学ぶことの重要性を理解し、そうした学びの機会を自ら見出し挑戦できる	自分にとって困難な経験を通じて何を学んだり得たりできるかを自分なりに理解している	自分にとって困難な経験を通じて学ぶことの重要性について考えたことがある	左記に達しない	
6	変化する社会への関心	社会やその動向に関心を持ち、背景や情報同士のつながりを意識して日頃から情報収集している	社会やその動向に関心を持ち、背景や情報同士のつながりを意識して情報収集ができる	社会やその動向に関心を持ち、自分なりに情報を収集しようとしている	社会やその動向に関心を持ち、情報を収集することの重要性について考えたことがある	左記に達しない	
7	学習環境の設定	学習の内容や求められる成果のレベルに応じて、学習スタイル＊や学習環境を選んだり創意工夫したりしながら効果的に学習を進めている	学習の内容や求められる成果のレベルに応じて、学習スタイル＊や学習環境を選び取ることができる	学習の内容や求められる成果のレベルに応じて、学習スタイル＊を選ぶことがなぜ重要かを理解している	学習の内容や求められる成果のレベルに応じて、学習スタイル＊を選んだことがある	左記に達しない	
8	他者との協働	他者と協働し（目標や責任を共有したうえで協力しながらものごとを進めていくこと）、目指す成果に向けて、他者に働きかけつつ、自分の役割を果たしている	他者と協働し（目標や責任を共有したうえで協力しながらものごとを進めていくこと）、目指す成果に向けて、自分の役割を果たすことができる	他者と協働すること（目標や責任を共有したうえで協力しながらものごとを進めていくこと）の重要性を理解し、そのための人間関係づくりができる	他者と協働すること（目標や責任を共有したうえで協力しながらものごとを進めていくこと）の必要性や重要性について考えたことがある	左記に達しない	

＊この表において、「学習スタイル」とは、例えば、「一人で、主に本や教科書を使って学習する」「他者と集まってそれぞれの学習をする」「他者と集まってディスカッションやグループワークをしたり、一緒に課題に取組む」「学外の学びの場に参加する」「一人で、主にインターネット（スマートフォン等を含む）プログラムなどで学習する」「他者と直接会うのではなく、SNS ツールを通じてディスカッションしたり課題に取組む」といった様々な方法や場所やツールの組み合わせの要素を含む学習のやり方を指す。

共同開発プログラム概要

「主体的学修を促す産学協働教育プログラム」全体の構成

次ページより、4大学がそれぞれの特色・教育プログラムの強みを活かして開発したプログラムを紹介する。プログラムは、全体を通じて学生の主体的学修を促していくことを念頭に置き、具体的には 5 ページで提示した8つの学修成果（アウトカム）の獲得を目指すものとして構成されている。

各大学のプログラムを 15 コマの授業案として実施する場合の構成例

コマ	内容
1	オリエンテーション
2	Ⅰ. はじめての「キャリアデザイン」–これまで・今・これから–
3	
4	
5	Ⅱ. 「協働による学び」のための基礎力づくり
6	
7	
8	中間振り返り
9	Ⅲ. 企業の課題探究と大学での学びに共通する「問題への取組み方」を考える
10	
11	
12	Ⅳ. 大学教育を通じて社会での実践力を育成する
13	
14	
15	振り返り

1. オリエンテーション

・授業の全体像を確認
・「主体的学修」が求められる背景、この授業の意図を説明
・目指す学修成果（アウトカム）の説明
・受講生同士の自己紹介　など

8. 中間振り返り
<ここまでの振り返りと今後の行動目標検討>

・目指す学修成果（アウトカム）の確認
・前半で得られた自身の学び・気づき、それにつながった「自身の行動」「他者からの働きかけ」について振り返る
・今後の授業での行動目標を設定する

15. 振り返り

・8コマ目の中間振り返りをふまえ、全体を通じて得られた学び・気づきを振り返り、受講生同士で共有する
・この授業で目指した学修成果（アウトカム）の達成度を評価する
・今後の大学生活での行動目標を考える

Ⅰ. はじめての「キャリアデザイン」–これまで・今・これから–　成城大学／授業案　→　P12～15

コマ	タイトル	重視する学修成果（アウトカム）
2	自分の "これまで" を振り返る	●自己成長のための行動 ●学び・経験への意欲 ●学習環境の設定 ●他者との協働
3	自分の "今（価値観や関心）" を探る	
4	自分の "将来" を描き明日からの行動をコミットする	

Ⅱ. 「協働による学び」のための基礎力づくり　福岡工業大学／授業案　→　P16～19

コマ	タイトル	重視する学修成果（アウトカム）
5	協働することの意義を考える	●大学での学びと社会との関連づけ ●学び・経験への意欲 ●学習環境の設定 ●他者との協働
6	協働のための議論スキル：「型」の習得	
7	協働のための議論スキル：「型」の活用	

Ⅲ. 企業の課題探究と大学での学びに共通する「問題への取組み方」を考える　新潟大学／授業案　→　P20～23

コマ	タイトル	重視する学修成果（アウトカム）
9	企業からの課題に対してアプローチ方法を考える	●社会で求められる力の理解 ●大学での学びと社会との関連づけ ●課題解決プロセスの実践 ●変化する社会への関心
10	１人１人の調査をもとにチームで仮説を立てる	
11	発表＋課題探究プロセスの振り返り	

Ⅳ. 大学教育を通じて社会での実践力を育成する　京都産業大学／授業案　→　P24～27

コマ	タイトル	重視する学修成果（アウトカム）
12	「考える」「伝える」とはどういうことか？	●社会で求められる力の理解 ●課題解決プロセスの実践 ●自己成長のための行動 ●変化する社会への関心
13	考えるためのフレームワーク	
14	分かりやすく伝える	

大学としての特徴、教育プログラムの特色

成城大学は、4学部・11学科・4研究科・2研究所、学生総数約6,000名を有する文系総合大学である。学校法人成城学園の建学の精神は「人生は真善美を理想とすると言われるが、学校は真理行われ道徳が通りまた美的の所でありたい。」であり、ミッションは「成城大学は個性の暢達を主眼として、広く専門の学芸を研究教授し、広角の視野と高度の教養を具え、かつ、豊かな個性を持つ社会の先導者を育成するとともに、文化の発展に貢献することを使命とします。（大学学則　第1条より）」、ビジョンは「成城大学は「所求第一義」の精神に則り、真理を究める研究を行うとともに、一人ひとりのもつ「天分」を伸ばす教育によって、グローバル社会を生き抜く「独立独行」の人材を育成します。」である。

成城大学の教育の特徴は、少人数教育のもと、親密な対話と交流を通して、優れた識見と人格を涵養すること、高度な専門教育とともに教養教育・外国語教育を通じて、豊かな知性と感性、自ら考え行動する力を育むことである。

本学の産学協働教育における強み・実績としては、平成18年度から展開している「キャリアサポートプログラム」をベースとし「気づき」「意味づけ」が出来る人材育成をもとに、平成23年度からは総合的なキャリア教育「就業力育成・認定プログラム」をスタートさせた。

同プログラムは、正課・正課外を融合した新たなスタイルで展開しており、「自ら考え行動する力」をもった積極的な人材を育成し、「職業観・勤労観」を醸成するために産業界や地域と連携した体系的な独自のプログラムとなっている。

また、「インターンシップ・プログラム」は、平成15年度から展開しており、毎年約60社・団体に協力いただき、大学提携型インターンシップを実施している。

同プログラムでは、単に就業体験を実施するだけでなく、事前・事後学習を重視しており、その後のキャリア形成に繋がる内容となっている。

大学の強み・実績を活かした本授業案のねらい

本学「就業力育成・認定プログラム」が育成する「成城の就業力。」は、「他者と協調しながらも自らを高め、集団を牽引する力」と規定しているが、これをベースに4大学で定めた産学協働教育の実施による学修成果（アウトカム）の中でも特に「自己成長のための行動」「学び・経験への意欲」「他者との協働」「学習環境の設定」の4項目の内容を理解し、アウトカムを意識した各自の具体的な行動計画を実行に移すことが出来ることをねらいとする。

「成城の就業力。」からの観点として「他者と協調することで自らの役割を認識すること」を学び、「自己成長のための行動」により、自身の成長や考えを整理していくことによって成長を自覚し、こうした「学び・経験への意欲」のサイクルを続けていくことが重要であると考えている。

今回の授業では自己理解を目的に、1コマ目に「歩んできた道（経験）を意味づける」、2コマ目に「強みと原動力を理解する」、3コマ目に「キャリアビジョンを描く」といった構成で時間軸（過去・現在・将来）を意識した。本学全学部共通教育科目において初年次前期に開講するキャリアデザイン科目は、各高校等から入学してきた4学部11学科の学生達が相互啓発をしながら、キャリアを大学生活（短期的）、就職（中期的）、生涯（長期的）を通してデザインする機会と位置づけた。グランドルールを設定し、個人・ペア・グループ・全体ワークを毎回取り入れている。本授業はこれらの要素を抽出し構成した。

本授業案で期待される学修成果（アウトカム）

1	社会で求められる力の理解	社会で力を発揮できるレベルと自身の現状のレベルを的確に把握している	
2	大学での学びと社会との関連づけ	自身の学びを適切に評価し、大学での学びが社会でどのように役立つか意味づけられる	
3	課題解決プロセスの実践	未知の課題に取組むために、知識・スキルの獲得・統合・活用のサイクルを回すことができる	
4	自己成長のための行動	自らの成長に対して目標を設定し、行動計画をたててコミットメントできる	◎
5	学び・経験への意欲	キャリア形成に対する自分の考え方を明確に意識し、今後の新たな学びや経験への意欲をもっている	◎
6	変化する社会への関心	変化する社会の動向に広く関心を持ち、情報を収集することができる	
7	学習環境の設定	必要とする学びに適した学習方法・環境を自分で選びとることができる	◎
8	他者との協働	他者と協働して成果につなげるための方法や考え方を知り、自分の役割・責任を果たすことができる	◎

授業案　＜1コマ目＞

15 コマの授業案の場合：2 コマ目（→ P10 ～ 11 参照）

タイトル	自分の“これまで”を振り返る
ねらい	この 3 コマの初回のセッションとして、自己理解を目的に、これまでのキャリアを振り返る。成功体験や失敗体験、正念場や人との出逢いがあってこそ今があるといった意味づけから自己肯定感を向上させる。他者との（ペア・グループ間での）共有により、それぞれの経験をわかちあい、多様なキャリアについても理解する。
概　要	過去の一つひとつの出来事をライフラインチャート上に記し、その時の自分の気持ちを思い出す。何が自分の背中を押してくれたか、そのきっかけを意味づける。ペアで共有し同じ世代でも異なる道を歩んできたことに気づく。グループでモチベーションの原動力を探り今後の自身の行動につなげていく。

進行案	学習の流れ		所要時間	学修成果（アウトカム）の対応 1 社会で求められる力の理解	2 大学での学びと社会との関連づけ	3 課題解決プロセスの実践	4 自己成長のための行動	5 学び・経験への意欲	6 変化する社会への関心	7 学習環境の設定	8 他者との協働
	導入	全体での起立・挨拶の後、今回のペア・グループで挨拶をする。グランドルールとクラスルールの共有、事務連絡、今日の授業の流れを簡単に説明する。	5分							○	
	導入	[アイスブレイク／ペアワーク] 「…があったからこそ今ここにいる」をテーマにペアで対話をする。90 秒ごとペアを替える。机の通路側の学生が前後にずれてペアを交代していく。3 ラウンドを終了したら席に戻る。最後の解説として、中国の故事「人間万事塞翁が馬」を朗読する。	10分				○		○		○
	導入	[趣旨説明] これまで歩んできた人生を振り返ることにより経験を意味づけし自信を持つ。未来は何もないところからは始まらない。キャリア形成において、まずこれまでの自分と向き合うその重要性を伝える。	5分							○	
	個人ワーク	ライフラインチャートを活用し、自身の幼少期から今までの、成功・失敗体験、正念場と乗り越えた原動力、出逢い（人や本やできごと）などを記す。その時どんな気持ちだったか、そこには誰がいて何がおきたかも分析する。	12分		○	○	○				
	講義	スーパーの「ライフキャリアレインボー」と、ハンセンの「統合的人生設計」について説明する。（キャリアを人生全体で考えること、それぞれに役割があること、グローバルな視点から流動的に考えることなどを伝える）	8分	○					○		
	ペアワーク→グループワーク	作成したライフラインチャートを共有する。グランドルールを守ること、自分が話したい範囲で無理をしないことを伝える。（グループワークではモチベーションの源はどこにあるのかについて語り合う）	20分				○				○
	まとめ	セレンディピティについて説明する。（茂木健一郎氏の書籍より抜粋） スティーブ・ジョブズのスタンフォード大学卒業式スピーチ（connecting dots）を学生が朗読する。	15分	○				○	○		
	リフレクション	今日の授業での学びを意味づけ、シートに感想を記入する。次回予告の後、ペア・グループの学生と挨拶をしあい、終了。	15分		○		○				

活用する資料・データ ステークホルダーの協力	
	■活用する資料 ・ライフラインチャート（上部がポジティブゾーン、下部がネガティブゾーン、幼少期から今に至るまでの成功体験、失敗体験、予期せぬ出来事、正念場、ネガティブゾーンから這い上がったきっかけ、出逢いなどを記すテンプレート） ・ライフキャリアレインボー（ドナルドスーパー）と統合的人生設計（サニーハンセン）の理論解説シート ・スティーブ・ジョブズのスピーチ原稿（授業終了時に配付） ・授業担当者へ提出するシート ■その他 ・授業の運営：SA/TAは充てずに授業の準備も履修生が率先して行う。

授業案　＜２コマ目＞

15 コマの授業案の場合：3 コマ目（→ P10 ～ 11 参照）

タイトル	自分の“今（価値観や関心）”を探る
ねらい	自分の強みや興味関心を整理し、どのような人生を歩みたいか、価値観、人生観、仕事観を探ることにより 自身をさらに理解する。他者の多様な考え方や関心を聞き、自身の「観」の幅を拡げていく。仕事にどう活かせるかといった視点から観ることにより、職業観、勤労観についても考える。
概　要	どんな人生を生きたいか、価値観シートの約 50 の項目からしっくりくる生き方・働き方を 3 つに絞り込み優先順位をつける。価値観を表す約 70 の熟語から 3 つに絞り込み優先順位をつける。職業関心アセスメントを実施する。これらを他者と共有する。理論は職業興味の視点からホランドの職業選択理論を扱う。

進行案	学習の流れ		所要時間	学修成果（アウトカム）の対応 1 社会で求められる力の理解	2 大学での学びと社会との関連づけ	3 課題解決プロセスの実践	4 自己成長のための行動	5 学び・経験への意欲	6 変化する社会への関心	7 学習環境の設定	8 他者との協働
	導入	全体での起立・挨拶の後、今回のペア・グループで挨拶をする。グランドルールとクラスルールの共有、事務連絡、今日の授業の流れを簡単に説明する。	5分							○	
	導入	[アイスブレイク／ペアワーク] どんな生き方をしたいか、自分の人生を簡単な文章にしポストイットに記し回収（全員分をまとめて印刷し後日配付する）。ペアで共有。	10分				○				○
	導入	[前回のおさらい] 自分の“これまで”（歩んできた道や経験・出逢い）を振り返り、そのプロセスに意味があることを共有。	5分				○				
	導入	[趣旨説明] 価値観（自分のこだわりや意味するもの）の意味説明。どんな生き方をしたいか、自身の「観」を様々な視点から観る重要性を説明する。	5分							○	
	個人ワーク	どんな生き方をしたいか、どんな働き方をしたいか、どんな言葉がしっくりくるかが記されたシートから、関心があるものすべてにチェックをつけ、それぞれ 3 つに絞り込み優先順位をつける。その後に、職業関心アセスメントを実施する。	15分			○	○				
	講義	ホランドの職業選択理論について説明（ただし、世の中の職業も、自身の職業興味も、日々変化し進化することを伝える）。	10分					○	○		
	グループワーク	個人ワークでシートに記した内容（とその理由）を共有。グランドルールを守ること、自分が話したい範囲で無理をしないことを伝える。	15分					○	○		○
	全体発表	代表者 2 名（挙手・他薦・指名）が、グループワークで共有した内容・自分自身の感想を、クラス全員を前に教壇で発表。所要時間 1 分と伝える。発表者は、学部・学科・学年・氏名・結論から先に内容を伝え「以上です」で締める。→全員で拍手する。	5分					○	○		○
	まとめ	関心や行動範囲を拡げてまずやってみることにより可能性が拡がる。ホランドの理論から「役割は人を育てる」という視点に繋げる。	10分	○				○	○		
	リフレクション	今日の授業での学びを意味づけ、シートに感想を記入する。次回予告の後、ペア・グループの学生と挨拶をしあい、終了。	10分		○		○				

活用する資料・データ ステークホルダーの協力	■活用する資料 ・価値観シート（どんな生活をしたいか、仕事をしたいか、”しっくりくる”単語を選択し優先順位をつける） ・職業関心アセスメント（厚生労働省の職業分類より60の職業を職業選択理論の6つのタイプに基づき抽出） ・職業選択論（ホランド）の理論解説シート ・授業担当者へ提出するシート

授業案　＜３コマ目＞

15 コマの授業案の場合：4 コマ目（→ P10 ～ 11 参照）

タイトル	自分の”将来”を描き明日からの行動をコミットする
ねらい	この３コマの最終回は将来にフォーカスする。自分自身はどうなりたいか先ずビジョンを描く。そして、実際に自身が目標としたい部分に絞り込む。大学時代の今だからこそできることを整理し周囲に宣言する。このプロセスを通して自己効力感を向上させる。
概　要	自分の夢をリストにする。将来を（漠然にでも）イメージできた時点で、次にペアワークで自分の夢を相手に絵にしてもらう（ビジョンの具現化）。他者のビジョンと向き合い、将来について広い視点から物事を考える。 理論を学び、変化に柔軟に、自身の存在や貢献に自信を持つ。一歩踏み出す意識を整える。

進行案	学習の流れ		所要時間	学修成果（アウトカム）の対応 1 社会で求められる力の理解	2 大学での学びと社会との関連づけ	3 課題解決プロセスの実践	4 自己成長のための行動	5 学び・経験への意欲	6 変化する社会への関心	7 学習環境の設定	8 他者との協働
	導入	全体での起立・挨拶の後、今回のペア・グループで挨拶をする。グランドルールとクラスルールの共有、事務連絡、今日の授業の流れを簡単に説明する。	3分							○	
	導入	[アイスブレイク／ペア・グループワーク] ドリームリストとアクションリストを作る。グループで共有し刺激を受け、自身のリストに追加するなど更新させる。	14分				○	○	○		○
	導入	[前回・前々回のおさらい] これまでの経験（前々回）と自分の強み（前回）が、今後のキャリア形成に重要なことを再認識する。	3分				○				
	導入	[趣旨説明] 目的、夢、目標、ビジョン、ゴールの説明、キャリアデザインのステップをおさらいし、3 回に亘るキャリアデザインの授業の最終回として、将来を描き、自身のキャリアの方向性について考える機会とすることを伝える。	3分							○	
	ペアワーク→グループワーク	「キャリアデッサン」を行う。社会人 2 年目の今日（○曜日○時頃）を具体的に描き、その場面をペアに伝え絵にしてもらう（上司に注意されている、営業でお客様に説明している、休日の美術館、など）。グループで共有。	37分				○				○
	講義	*1960 年代からのキャリア理論の変遷：ジョブマッチング（ホランド）→キャリアステージとライフステージ（スーパー）→ハップンスタンス（クルンボルツ） * 計画的偶発性理論（クルンボルツ）/ 積極的不確実性理論（ジェラット）	10分	○				○	○		
	個人ワーク	くじけそうになったら読む手紙を書き、ワークシートと一緒に保管（あるいは、切手を貼り住所を記して提出すれば教員が投函することを伝える）。	7分				○				
	解説	様々な生き方・考え方・働き方を尊重し、予期せぬ変化もチャンスと捉える、幅と波の柔軟性を持つことを伝える。	3分					○	○		
	全員ワーク	「マイクバトン」：これまで 3 回の学びを一つの熟語に表してマイクをバトンのように（発表し次の人に）渡すリズミカルなワーク（所要時間：50 名で 5 分）。マイクを持つ最後の人が時間内でまとめをする。	5分				○				○
	リフレクション	計 3 回の授業での学びを意味づけ、シートに感想を記入する。ペア・グループの学生と挨拶をしあい、終了。	5分		○		○	○			

活用する資料・データ ステークホルダーの協力	■活用する資料 ・ドリームリスト・アクションリスト・キャリアデッサンのテンプレート、手紙用便箋と封筒、授業担当者へ提出するシート ・計画的偶発性理論（クルンボルツ）・積極的不確実性理論（ジェラット）の理論解説シート ■その他 ・事前課題：目的、夢、目標、ビジョン、ゴールの意味調べ

大学としての特徴、教育プログラムの特色

福岡工業大学は、工学部・情報工学部・社会環境学部の3学部から成り男子学生が９割を占める中規模理系大学（収容定員 3,456 名）である。理工系という学問の性質上、学習スタイルとしては個人で取組むものが多く、他者との協働・協力・連携のあり方が問われることは少ない。例えば、理論的な基礎を理解するための数学及び物理科目、プログラミングや設計のための方法や手続きの学習やレポート作成などは一般的に、個人を単位として行われる。しかし学生が一度社会に出れば、たとえ技術者あるいは技術職であっても、技術者同士、関連部署、消費者等との円滑な意思疎通ができるコミュニケーション力を持ち、企業ないしは社会に貢献することが求められる。したがって、理工系大学に入学した学生に対して、コミュニケーション力を高めるような教育を充実させ、その仕組みを整えることは極めて重要である。

上記の問題意識を踏まえ、本学では、入学早期よりコミュニケーション能力の育成を中心に据えたキャリア教育の充実に力を入れ、プログラムを体系化し、展開を図っている。特に、1年次に徹底して基礎固めを行いその後に続く大学での効果的な学修へと繋げることを念頭に、前期に「キャリア形成」、後期に「コミュニケーション基礎」という2つの必修科目を設置し、全学必修科目として展開している。さらに、これらを効果的につなぐ発展版プログラムとして、夏季には「キャリア形成・アドバンスト・プログラム」を実施している。これは、発展的な学びを求める希望者を対象にした、4大学学生交流と短期就業体験を柱とする社会体験プログラムである。初年次における基礎力の涵養が、2年次以降のより専門的・実践的な学習や状況の中で発揮され、高度な学びへと繋がるように、カリキュラム内や就職課による支援体制を整え、学習機会を提供している。

大学の強み・実績を活かした本授業案のねらい

産学協働教育プログラムを通じた学びの効果を高め、学生の主体的な学修習慣づくりへとつなげていくためには、参加するうえでの基本的な姿勢・態度の形成が不可欠である。本３コマの講義は、基本的な姿勢・態度の形成を主眼に置くものであり、「協働」のための議論スキルを習得しそれを活用するプロセスを通じて、「協働」についての認識を深め、あらためて「大学での学び」や「学習環境づくり」について考えを深めていくことをねらいとする。４大学で定めた産学協働教育の実施による学修成果(アウトカム) の中では、特に「他者との協働」、「大学での学びと社会との関連づけ」、「学び・経験への意欲」、「学習環境の設定」の４点に重点を置く。

３コマの授業全体の流れとしては、まず他者と協働することの重要性と有用性を実感・認識させ、そのうえで協働の中でより良く貢献するための「議論スキル」の習得に取組みその活用について考えていく、というものである。より具体的には、１コマ目に、１つのテーマについてのディスカッションとその振り返りを行い、協働の意義や有用性について理解の深化を促す。２コマ目には、協働を効果的にするための議論スキルについて学ぶ。ディベートにおける主張・反論・総括の「型」を使いながら、論理的な考え方や伝え方をトレーニングする。３コマ目には、「型」を用いながらディベートを行い、スキルの活用及び定着を図る。そして３コマ全体のまとめとして、他者との相互作用の中で学ぶという考え方に触れながら、大学での学習環境づくりについて話題提供を行い、今後の学修のあり方について改めて考え深める機会をつくる。

本授業案で期待される学修成果（アウトカム）

1	社会で求められる力の理解	社会で力を発揮できるレベルと自身の現状のレベルを的確に把握している	
2	大学での学びと社会との関連づけ	自身の学びを適切に評価し、大学での学びが社会でどのように役立つか意味づけられる	◎
3	課題解決プロセスの実践	未知の課題に取組むために、知識・スキルの獲得・統合・活用のサイクルを回すことができる	
4	自己成長のための行動	自らの成長に対して目標を設定し、行動計画をたててコミットメントできる	
5	学び・経験への意欲	キャリア形成に対する自分の考え方を明確に意識し、今後の新たな学びや経験への意欲をもっている	◎
6	変化する社会への関心	変化する社会の動向に広く関心を持ち、情報を収集することができる	
7	学習環境の設定	必要とする学びに適した学習方法・環境を自分で選びとることができる	◎
8	他者との協働	他者と協働して成果につなげるための方法や考え方を知り、自分の役割・責任を果たすことができる	◎

授業案　＜１コマ目＞

15 コマの授業案の場合：5 コマ目（→ P10 ～ 11 参照）

				学修成果（アウトカム）の対応							
				1 社会で求められる力の理解	2 大学での学びと社会との関連づけ	3 課題解決プロセスの実践	4 自己成長のための行動	5 学び・経験への意欲	6 変化する社会への関心	7 学習環境の設定	8 他者との協働
タイトル	協働することの意義を考える										
ねらい	○他者と協働することの重要性と有用性に気づき、協働のために各々の採るべき役割について理解を深める。 ○協働を効果的にするための中核的な要素の１つとして「論理的に考え議論する力」があることを伝え、その基本となる「型」に対する習得・学習意欲を高める（２コマ目・３コマ目への動機づけ）。										
概　要	まず、グループで１つのテーマについてディスカッションさせる。次に、行ったディスカッションの振り返りを行う。振り返りでは、活動の中で各々が果たした役割に焦点を当てて共有させ、協働の意義や有用性について、理解の深化を促す。最後に、協働の成果をより効果的なものにするために、いろいろな知識やスキルがあることを説明し、次回以降の授業では、議論の基本となる「型」を学習することを伝える。										
進行案	学習の流れ		所要時間								
	導入	授業の趣旨と全体の流れを説明する。	10分	○	○			○	○	○	○
	ワーク１	１つのテーマ（例：大学生は長期のインターンシップに参加すべきか）について、①個人で考えを書き出し、②グループでディスカッションを行いグループとしての意見をまとめ、③グループの代表者が発表してクラス全体で共有する。	30分								
	ワーク２	ワーク１で行ったディスカッション活動について、(1) グループで話すことによる知識の広がりや考えの深まり、(2) それぞれの貢献のあり方（担っていた役割）に焦点を当てて振り返る。振り返りでは、①個人で気づきを書き出し、②グループで共有し、③数名の発表を通じてクラス全体で共有する。	25分	○	○		○	○		○	○
	講義	協働の意義や有用性についてまとめる。また、協働することは社会においても大学の学びにおいても共通に重要であることを伝えたうえで、(1) 受動的学びと主体的な学びの違い、(2) 主体的な学びを支える様々な学びのあり方について話題提供する。	10分								
	ワーク３	協働をより効果的にするために必要なことは何かについて、①個人で考えたことを書き出し、②グループで共有し、③数名の発表を通じてクラス全体で共有する。	10分					○		○	○
	まとめと課題提示	協働を効果的にするための具体的な方法の１つである「議論スキル」に焦点を当て、続く２コマではそれを習得していくことを伝え、次回授業までに行う課題を提示する。 ＜課題例＞次回用いる論題（例：日本は労働者派遣を廃止すべき）についてのリサーチシートに記入（どのような賛成・反対意見がありうるか等）。	5分					○		○	○
活用する資料・データ ステークホルダーの協力	■活用する資料 ・ワーク１で用いる論題及び資料、ワーク１～３で用いるワークシート ・次回までの課題用リサーチシート（参考：中野美香（2010）『大学生からのコミュニケーション入門』ナカニシヤ出版、p.84-85） ■その他 ・グループの意見共有にはホワイトボード等、視覚的に共有できるツールが準備されていることが望ましい。										
備　考	ワーク１で用いるテーマは、「調べなくても議論することが可能であるが、詳しい知識を持ったメンバーがいれば議論の質が上がる」程度のものであり、知識や経験の有無の個人差に気づけるものが良い（例：大学生は長期のインターンシップに参加すべきか）。また、関連資料として新聞記事や統計図表などを用いることで、読み取りの得手不得手の個人差に気づけるものが良い。										

授業案　＜２コマ目＞

15 コマの授業案の場合：6 コマ目（→ P10 ～ 11 参照）

タイトル	協働のための議論スキル：「型」の習得
ねらい	協働を効果的にするために役立つスキルの１つとして、「議論スキル」（ディベートにおける主張、反論、総括の「型」）を学ぶ。
概　要	主張、反論、総括の「型」を習得するために、各ステップの「型」の説明を行い、ペアで「賛成側」「反対側」の立場に立ち、互いに主張をつくり発表していくことを繰り返す。最後に、議論においては、マター（知識・内容）とマナー（方法＝型）の双方を意識して相互に高めながら学ぶことが効果的であることを伝える。

学修成果（アウトカム）の対応

進行案	学習の流れ		所要時間	1 社会で求められる力の理解	2 大学での学びと社会との関連づけ	3 課題解決プロセスの実践	4 自己成長のための行動	5 学び・経験への意欲	6 変化する社会への関心	7 学習環境の設定	8 他者との協働
	導入	前回を振り返り、協働において「議論スキル」が役立つことを確認する。また、議論には一般的に３つの段階（主張・反論・総括）があり、本時はディベートの流れに沿ってこれら３つの「型」を学ぶことを確認する。	10分		○			○		○	○
	講義	主張の型（主張＋理由＋例＋結論）を説明する。	10分								
	ワーク１	リサーチしてきた論題（例：日本は労働者派遣を廃止すべき）について、①個人でワークシートを記入。※このとき、個人の本当の意見とは関係なく教員が賛成と反対の立場を指定する（例：右列の学生は賛成、左列の学生は反対）。②賛成と反対の立場でペアになり、それぞれが主張を発表する。	10分								
	講義	反論の型（引用＋主張＋理由＋例＋結論）を説明する。	10分					○		○	○
	ワーク２	①互いの主張に対する反論を考え、ワークシートに記入。②ペアでそれぞれが反論を発表する。	10分								
	講義	総括の型（再反論＋比較・整理＋優位性＋結論）を説明する。	10分								
	ワーク３	①総括を考え個々でワークシートに記入。②ペアでそれぞれが総括を発表する。	10分								
	ワーク４	代表で１～２ペアが全員の前で自分たちのやりとりを発表。良い点や改善点を指摘しながら全体共有。	10分								
	まとめと課題提示	議論においては、マター（知識・内容）とマナー（方法＝型）の双方を意識して相互に高めながら学ぶことが効果的であることを伝え、次回授業までに行う課題を提示する。＜課題例＞次回用いる論題（例：就職活動の解禁時期を繰り上げるべきである）についてのリサーチシートに記入（どのような賛成・反対意見がありうるか等）。	10分				○	○		○	○

活用する資料・データ ステークホルダーの協力	■活用する資料 ・「型」のワークシート（参考：中野美香（2010）『大学生からのコミュニケーション入門』ナカニシヤ出版、p. 110-111） ・次回までの課題用リサーチシート（参考：中野美香（2010）『大学生からのコミュニケーション入門』ナカニシヤ出版、p. 84-85）
備　考	ワーク１～３において、自分の本来の意見とは違っていても、あえて指定して「賛成側」と「反対側」の立場を持たせることにより、視点を変えて議論することが体験できる。

授業案　＜３コマ目＞

15 コマの授業案の場合：7 コマ目（→ P10 ～ 11 参照）

タイトル	協働のための議論スキル：「型」の活用
ねらい	○ディベートの実践を通して「型」を活用する。 ○様々な学びのスタイルがあることを確認し、大学での学び方や学習環境に対する理解を深める。
概　要	１つのテーマについて３対３（２対２）ディベートを実践的に行い、「型」を習得する。その後、グループで今回の一連の学びを振り返り、「型」を用いた議論の有用性や活用に関して気づきや意見を共有する。最後に、学習の方法や環境について改めて話題提供を行い、各々の大学での学び方を発展させる具体的な方法を考えさせることを通して、大学での学び方に対する理解を深める。

学修成果（アウトカム）の対応

進行案	学習の流れ		所要時間	1 社会で求められる力の理解	2 大学での学びと社会との関連づけ	3 課題解決プロセスの実践	4 自己成長のための行動	5 学び・経験への意欲	6 変化する社会への関心	7 学習環境の設定	8 他者との協働
	導入	本日の流れの確認と３つの型の復習とディベートの流れの説明を行う。	10分		○					○	○
	ワーク１	３対３でディベートを実践する。※このとき、個人の本当の意見とは関係なく教員が賛成と反対の立場を指定して３人グループをつくり、３対３でディベートを行う。	30分							○	○
	ワーク２	ディベートを振り返り感想を共有する。このとき、(1) 自分の本来の意見とは関係なく賛否の立場を指定されて討論した感想、(2)「型」を用いたディベートの感想、(3)「型」の活用やマターとマナーを相互に学ぶことの意味などに着目させる。	15分		○		○	○		○	○
	講義	大学での学びを効果的にしていくための学習の方法・スタイルや学習環境に関して話題提供する。	10分		○		○			○	○
	ワーク３	学生自身の現在の学習の仕方を見直し、より効果的な学び方の可能性について、①個人で気づきを書き出し、②グループで共有し、③数名の発表を通じてクラス全体で共有する。	15分								
	まとめ	まとめとして、次の３点を確認して授業を締めくくる。(1) 今後、社会や大学で他者と協働して仕事をしたり学んだりすることによって、その効果を高めることができること、(2) 協働のために個人が採るべき役割がありそのための知識やスキルを高めることが社会貢献において大切であり、その具体的な方法として議論の基本の「型」を学習したこと、(3) 今後も大学で学び方を学び、自分と状況に合った学習環境を設計していくことが大切であること。	10分		○			○		○	○

活用する資料・データ ステークホルダーの協力	■活用する資料 ・ワークシート（参考：中野美香（2010）『大学生からのコミュニケーション入門』ナカニシヤ出版、p. 110-111） ・次回までの課題用リサーチシート（参考：中野美香（2010）『大学生からのコミュニケーション入門』ナカニシヤ出版、p. 84-85） ■その他 ・グループの意見共有にはホワイトボード等、視覚的に共有できるツールが準備されていることが望ましい。
備　考	・ワーク１において、自分の本来の意見とは違っていても、あえて指定して「賛成側」と「反対側」の立場を持たせることにより、視点を変えて議論することが体験できる。 ・３対３で行う場合は、「主張」「反論」「総括」の発表を１人１つ担当する（ただし、議論や作戦は全員で行う）。２対２で行う場合は「主張」を担当した者が「総括」を担当する。

企業の課題探究と大学での学びに共通する「問題への取組み方」を考える

大学としての特徴、教育プログラムの特色

新潟大学は、9 学部・5 研究科・2 専門職大学院・2 研究所、学生総数約 13,000 名を有する日本海側有数の総合大学であり、「自律と創生を全学の理念とし、教育と研究を通じて地域や世界の着実な発展に貢献する」ことを大学の理念･目標としている。平成 18 年度以降に、学士課程を「知識･理解」、「当該分野固有の能力」、「汎用的能力」、「態度･姿勢」の4つの教育目標領域に基づく到達目標明示型の「主専攻プログラム（教育プログラム）」として 42 のプログラムに再編した。さらに、新潟大学学士力アセスメントシステム（NBAS）を開発し、学修成果の可視化と学生の自律的学修を支援する機能（学修ポートフォリオ）を整え、現在はカリキュラムマップに基づくカリキュラム改善システムの構築を進めている。

また、主専攻プログラムごとの学位授与方針の明確化とその達成度の評価基準の策定を進め、初年次の転換教育並びにアクティブ・ラーニング等の能動的学修を組み込んだ教育課程の再編によるカリキュラム改革を推進するとともに、学事暦改革として、クォーター制を導入し、能動的学修を集中的に実施できる期間として設定する第 2 クォーター（6 週間）において、初年次では長期学外学修科目を含むインテンシブな能動的学修科目の履修を必修化する予定である。

本学の産学協働教育における強み・実績としては、大規模総合大学の強みを活かし、平成 24 年度から、キャリアセンターが中心となり、新しい形の「チームインターンシップ」を正課科目として実施した。平成 26 年度には、「チームインターンシップ」から「企業課題探求型 長期・有償型インターンシップ」に形を変え、学部や専攻を飛び越え、課題に対し取組むことで、社会で必要とされる力を鍛え、専門知識を活かすために汎用的能力の育成を図っている。

大学の強み・実績を活かした本授業案のねらい

本学の教育目標である「時代の課題に的確に対応し、精選された教育課程を通じて、豊かな教養と高い専門性を習得し、広範に活躍する人材を養成する」を念頭に置きながら、4大学で定めた産学協働教育の実施による学修成果（アウトカム）の中でも、特に「課題解決プロセスの実践」、「変化する社会への関心」、「社会で求められる力の理解」、「大学での学びと社会との関連づけ」の4項目の内容を理解し、学修成果(アウトカム）を意識した各自の具体的な行動計画を実行に移すことができることをねらいとする。3コマを通して、変化の激しい社会の中を常に自ら学びながら成長し続けられる持久力（基礎体力）を鍛え、専門知識を活かすために汎用的能力の必要性を理解させ、主体的学習習慣の定着につなげることを目的とする。

授業の概要としては、本学の産学協働教育における強みを活かし企業（社会）で課題を解決することと大学での学びに共通する「問題への取組み方」を考えることを中心に講義、演習を組み合わせて行う。

具体的には、1コマ目では、「リーダーシップ理解」、「多様性理解」を中心に講義と演習を行い、最後に企業からの課題を提示する。2コマ目では、企業から出された課題をチームで検討し、次回までに発表する内容をまとめる。3コマ目では前半にチームで発表を行い、後半では発表までの課題探求プロセスの振り返りと、大学での学びと共通する「問題への取組み方」について考察を行う。

本授業案で期待される学修成果（アウトカム）

1	社会で求められる力の理解	社会で力を発揮できるレベルと自身の現状のレベルを的確に把握している	◎
2	大学での学びと社会との関連づけ	自身の学びを適切に評価し、大学での学びが社会でどのように役立つか意味づけられる	◎
3	課題解決プロセスの実践	未知の課題に取組むために、知識・スキルの獲得・統合・活用のサイクルを回すことができる	◎
4	自己成長のための行動	自らの成長に対して目標を設定し、行動計画をたててコミットメントできる	
5	学び・経験への意欲	キャリア形成に対する自分の考え方を明確に意識し、今後の新たな学びや経験への意欲をもっている	
6	変化する社会への関心	変化する社会の動向に広く関心を持ち、情報を収集することができる	◎
7	学習環境の設定	必要とする学びに適した学習方法・環境を自分で選びとることができる	
8	他者との協働	他者と協働して成果につなげるための方法や考え方を知り、自分の役割・責任を果たすことができる	

授業案　＜1コマ目＞

15 コマの授業案の場合：9 コマ目（→ P10 ～ 11 参照）

タイトル	企業からの課題に対してアプローチ方法を考える
ねらい	○チームで課題に取組む上で必要となる「リーダーシップ理解」「多様性理解」を深める。 ○企業課題を題材に、自分自身の「社会とつながる課題への関心・理解度」「課題探究の際の考え方」を意識する。
概　要	チームで課題に取組むうえで必要となる「リーダーシップ理解」「多様性理解」を中心に講義とグループ演習を行う。 後半では実際に取組む企業からの課題を発表し、その課題の背景を理解するための素材を提示する。それを基に、各自がこれまで大学で実践してきた課題探究の方法をふまえて、課題の本質を明らかにするための調査内容・方法を検討する。

進行案	学習の流れ		所要時間	1 社会で求められる力の理解	2 大学での学びと社会との関連づけ	3 課題解決プロセスの実践	4 自己成長のための行動	5 学び・経験への意欲	6 変化する社会への関心	7 学習環境の設定	8 他者との協働
	導入	（1）授業全体（3コマ）の概要、ねらい、学習の達成目標等の説明 （2）この時間の講義概要とねらいの説明	15分	○	○			○	○		
	グループワーク	チーム分け	25分								
		「リーダーシップ理解」「多様性理解」についてチームで話し合い、それぞれ自分の考えをシェアする。					○	○	○	○	○
	発表	チーム代表者発表									
	講義	（1）「リーダーシップ理解」の講義 （2）「多様性理解」の講義	15分	○					○		
	課題提示	・チームで取組む「企業課題」を発表する。その際、課題の意図や背景についても学生に理解させるために、新聞記事・統計データを示すなどの工夫を行う。 ・課題のゴール（提案の期日、発表にかける時間や方法、発表の項目 等）を提示する。	35分	○	○	○			○		○
	個人ワーク	課題を明らかにするために、何についてどのような方法で調査すればよいかを各自検討し、紙に書き出す。									
	グループワーク	各自の考えをチーム内でシェアし、次回の講義までの各自の調査内容を決定する。									

活用する資料･データ ステークホルダーの協力	■活用する資料 ・企業課題の理解に必要な資料　・調査カード（調査内容、情報の出典、自分の一言感想を記入） ■ステークホルダーの協力 企業に学生が取組む課題およびその課題の背景を示す資料等の提供をお願いする（可能であれば､直接授業内で学生に説明）。課題は､実際に企業の担当者が抱える問題意識をベースに､学生が 3 週間の調査検討で発表可能なスケールのものであることが必要である。ある程度学生にとっても身近な話題でありつつ､統計データや新聞記事等を調べることで議論の深まるテーマであることが望ましい。
備　考	次回講義までの課題として､チームで話し合った内容に沿って各自が課題に対する調査を行う。調査内容は必ず「調査カード」に記載させる。

授業案　＜２コマ目＞

15 コマの授業案の場合:10 コマ目（→ P10 ～ 11 参照）

タイトル	１人１人の調査をもとにチームで仮説を立てる
ねらい	企業課題をチームで探究していく実践を通じて、「チームで成果を出すために必要な力」「課題探究のプロセス」について理解を深める。
概　要	グループワークを中心に授業を行う。前回の講義後から企業課題に対して各自が調査してきた内容をもとに、チームとして発表したい仮説を検討し、発表の準備を進める。 またアカデミックな課題探究の際に用いられる仮説検証のプロセスについても改めて説明し、今回の企業課題に取組む際の考え方を意識させる。

学修成果（アウトカム）の対応

進行案	学習の流れ		所要時間	1 社会で求められる力の理解	2 大学での学びと社会との関連づけ	3 課題解決プロセスの実践	4 自己成長のための行動	5 学び・経験への意欲	6 変化する社会への関心	7 学習環境の設定	8 他者との協働
	導入	（1）前回の講義の振り返り （2）この時間の講義概要とねらいの説明	10分	○		○	○	○	○		
	グループワーク	企業課題について各自が調査してきた内容とそこから読み取れることをチーム内で共有する。それを基にチームとして発表したい仮説（とその根拠）をどう立てるかについて話し合う。 チームとしての「仮説」をＡ３用紙に書き出す。 教員は全体をまわりながら、各チームの方向性や到達度を確認する。	30分			○			○	○	○
	講義	各チームの様子をふまえながら、企業視点での簡単なフィードバックを行う。その後、 （1）論理的思考（ロジカルシンキング） （2）仮説検証のプロセス （1）（2）の観点から、仮説設定～検証に至る「問題への取組み方」のプロセスを再確認する。普段、専門科目の課題・レポート等で自分が用いている課題探究の方法・考え方を意識させる。	15分	○	○	○			○		
	グループワーク	チーム内で再度、自分たちの仮説を検討し、その仮説を説得力をもって語るための追加調査の内容、発表の構成等について検討する。次回の発表までに必要な作業や期限を確認させ、チーム内での役割確認を促す。	30分	○		○			○	○	○
	まとめ	次回の発表の流れ・事前提出物などを全体で確認する。	５分								

活用する資料・データ ステークホルダーの協力	■活用する資料 ・論理的思考（ロジカルシンキング）、仮説検証のプロセスを説明するための資料 ■その他 ・Ａ３用紙、マジック、名札、ふせんなどを用意し、グループワークに必要な環境を整える。
備　考	次回講義までの課題として、発表のための資料作成・発表練習を行う。

授業案　＜３コマ目＞

15 コマの授業案の場合:11 コマ目（→ P10 ～ 11 参照）

タイトル	発表＋課題探究プロセスの振り返り
ねらい	企業課題に対する仮説の発表と企業担当者・教員からのフィードバックを通じ、社会で求められる力・考え方の理解を深め、自分の普段の学びのあり方を自己評価する。
概　要	前半にチームごとの発表を行い、企業課題に対して各チームで検討した仮説とその根拠のプレゼンテーションを行う。さらに後半では発表までの課題探求プロセスをチーム・個人で振り返り、大学での学びと共通する「問題への取組み方」について理解を深める。

学修成果（アウトカム）の対応

進行案	学習の流れ		所要時間	1 社会で求められる力の理解	2 大学での学びと社会との関連づけ	3 課題解決プロセスの実践	4 自己成長のための行動	5 学び・経験への意欲	6 変化する社会への関心	7 学習環境の設定	8 他者との協働
	導入	（1）前回の講義の振り返り （2）この時間の講義概要とねらいの説明	5分	○		○	○	○	○		
	グループ発表	各チームから、企業課題についての自分たちの仮説、およびその根拠を発表する。発表形式はパワーポイントまたは模造紙を使用して簡潔にまとめ、データ等は手元資料で提示する（発表時間は受講人数・チーム数に応じて調整する）。各発表に対し、企業担当者・教員から随時、質疑応答を行う（時間に応じて他学生からの質疑応答も実施）。	40分	○		○	○	○	○		
	講評	企業担当者・教員から発表全体を通してのフィードバックを行う。単純なプレゼンテーションの出来だけでなく、課題の背景理解や調査の観点について期待を超えていた点、逆に期待に届かなかった点を伝える。	10分	○	○	○	○		○		○
	グループワーク	チーム内で、「メンバーのどんな活動や発言がチームの成果に貢献していたか」、逆に「成果に達するには何が足りなかったか」を振り返り、共有する。	10分								
	個人ワーク	個人での振り返りを行い、シートを記入する。 （1）企業の課題に向き合うことと大学での学びとの関連性についての自分の考え （2）（1）をふまえ、大学生活で今後積みたい経験・学び	10分		○	○	○	○	○		
	全体シェア	①各自の考えをチーム内で共有し、代表者数名から発表させる。 ②教員からあらためて、大学での学びとの間で共通する課題探究プロセスについて意味づけを行う。	15分	○	○	○	○	○	○		

活用する資料・データ ステークホルダーの協力	■活用する資料 ・各チームの手元資料、振り返り記入シート ■ステークホルダーの協力 ・企業担当者から、学生発表に対して企業視点でのフィードバックをお願いする。 ■その他 ・プロジェクター・スクリーン・タイマー等を必要に応じて用意し、発表に必要な環境を整える。
備　考	

大学としての特徴、教育プログラムの特色

京都産業大学は、8 学部・10 研究科、学生数約 13,000 名を有する総合大学である。

本学は、創立時からの「産学協同」の理念に基づき、これまでキャリア形成支援教育を実践してきた。その根底にあるコンセプトは、産学協働による教育であり、本学創設者である初代総長の荒木俊馬は、第 1 回入学式告辞（昭和 40 年 4 月 21 日）で次のように述べている。

「本学は産学協同を実践する綜合大学の完成を最終目標と致しますが故に京都産業大学と名付けました」

本学のキャリア形成支援教育は、平成 11 年のインターンシップの導入から始まる。インターンシップを就職との関連で行うのではなく、大学教育との融合を目指したため、担当部署を「教務部」（現「教学センター」）に設置した。教務部の担当がその後「キャリア教育研究開発センター」として発展的に改組され、キャリア教育科目の実施運営を担うに至った。就職支援については、別組織として「進路・就職支援センター」が設置されている。

平成 26 年 4 月にキャリア教育研究開発センターは、「コーオプ教育研究開発センター」へと改組された。それまでもキャリア教育研究開発センターの英文名称は、「Center of Research & Development for Cooperative Education」と、通常であれば「Career Education」と名乗るところを「Cooperative Education」としていた。それは、創設時からの産学協働の理念に基づくものであったからである。創立 50 周年を迎え、日本における産学協働教育のリーディングユニバーシティを目指している。

本学の「キャリア形成支援科目」は、学内 (ON) と学外（OFF）を往還するよう体系化されている。これは、社会と大学での学びを交互に行い、有機的に融合させるという産学協働教育の考え方に基づいている。

大学内での学びと、社会での実践経験との融合により、夢を実現し、社会を生き抜く力を身につけるプログラムを構築している。

大学の強み・実績を活かした本授業案のねらい

本学のキャリア教育の根底にあるコンセプトは産学協働である。産学の協働である以上、大学だけに利点があるのではなく、企業にとっても利点がなければ産学協働を継続することはできない。

産学協働において大学が企業に貢献できること、それは人材育成、特に中堅・中小企業の若手社員の育成である。このような問題意識から、大学（学生）と企業（若手社員）がハイブリッド（混成）し、双方の人材を育成するプログラムを開始した。

若手社員 1 名と学生 3 名がチームを形成し、社員が直面している業務上の課題の解決に向け、調査や分析、ディスカッションや上司への中間プレゼンテーションなど検討を重ね、最終的に課題解決の方策を提案する。学生は実感的に仕事とは何かを理解し、若手社員はリーダーシップ、マネジメントの経験を積む。企業、大学双方にメリットをもたらす新しい人材育成の実践である。

その土台となる力は「考える」「伝える」である。1 コマ目は、「考える」「伝える」とはどのようなことなのか、その共通するポイントとなる「かたまり」と「つながり」を理解する。2 コマ目は、「考える」に焦点を当て、フレームワークを仕事現場でどのように活用するのかを理解する。3 コマ目は、「伝える」に焦点を当て、分かりやすく伝える方法を通して身につける。学生にとっては、この力が大学での学びを通して獲得できることを実感させ、若手社会人には仕事で活用できることをねらいとしている。

本授業案で期待される学修成果（アウトカム）

1	社会で求められる力の理解	社会で力を発揮できるレベルと自身の現状のレベルを的確に把握している	◎
2	大学での学びと社会との関連づけ	自身の学びを適切に評価し、大学での学びが社会でどのように役立つか意味づけられる	
3	課題解決プロセスの実践	未知の課題に取組むために、知識・スキルの獲得・統合・活用のサイクルを回すことができる	◎
4	自己成長のための行動	自らの成長に対して目標を設定し、行動計画をたててコミットメントできる	◎
5	学び・経験への意欲	キャリア形成に対する自分の考え方を明確に意識し、今後の新たな学びや経験への意欲をもっている	
6	変化する社会への関心	変化する社会の動向に広く関心を持ち、情報を収集することができる	◎
7	学習環境の設定	必要とする学びに適した学習方法・環境を自分で選びとることができる	
8	他者との協働	他者と協働して成果につなげるための方法や考え方を知り、自分の役割・責任を果たすことができる	

授業案　＜１コマ目＞

15 コマの授業案の場合:12 コマ目（→ P10 ～ 11 参照）

タイトル	「考える」「伝える」とはどういうことか？
ねらい	○３コマを通して「考える」「伝える」とはどういうことなのかを理解し、その力の育成を図る。 ○本プログラムの受講生は学生のみならず若手社員も含まれているため、仕事を進める上で実践的に役立つスキル・知識などの修得を目的としている。 ○学生にとっては卒業後、働くうえで必ず求められるこの２つの力を身につけることを意図している。
概　要	○「考える」「伝える」ための基本的な考え方は、「かたまり」を作ることと「つながり」を捉えることにある。課題、情報、現状等からどのように「かたまり」を作り、「かたまり」間の関係性をどのように捉えるかということに対する基本的な理解を深める。 ○フレームワークを使って考えることの有効性について理解する。しかしフレームワークはあくまでも手法であって、そもそもの大前提となる課題の意義、なぜその課題を解決する必要があるのか、それは自社にとってどのような価値があるのか、という認識が重要である。そのために、企業とは何か、その存在意義・目的について根本から理解を深める。

進行案	学習の流れ		所要時間	1 社会で求められる力の理解	2 大学での学びと社会との関連づけ	3 課題解決プロセスの実践	4 自己成長のための行動	5 学び・経験への意欲	6 変化する社会への関心	7 学習環境の設定	8 他者との協働
	導入	・３コマを通しての目的を説明する。 ・「考える」「伝える」とはどういうことなのか、なぜ必要なのか。	10 分	○							
	講義＆グループワーク	・企業とは何か。P.F.ドラッカーの言う「企業の目的」、「顧客の創造」について解説するとともに、自社の目的、顧客の創造について考える。 ・課題の解決とは何のために行うのか、自社においてはどのような意義があるのかについて検討する。 ・若手社員が学生に分かりやすく説明することによって、自社、自身についての内省を深める。 ・「フレームワーク」の活用は、あくまでも方法論であって、目的ではないことを理解する。	20 分	○			○				○
	講義＆グループワーク	・「考える」出発点は、「思い込みを捨てる」「常識を疑う」ことにあると認識する。事例を使い常識に囚われることで思考が停止することを実感する。 ・常識から離れるためには、どの「視点」から考えているのかを自己認識し、言語化することが必要。視点を移動させることで複眼的に考える力が身につく。視点を移動していくことで「かたまり」を作っていく。事例を活用し理解する。	20 分	○		○		○			○
	講義＆グループワーク	・複雑な情報、現状を「かたまり」にしていくためにはフレームワークの活用が有効であることを理解する。 ・具体的なフレームワークとしてSWOT分析について説明。簡単な事例で理解を深める。（「京都産業大学の受験生を増やすために」「ラーメン屋さんを繁盛させるために」） ・自社をSWOT分析し、戦略を考える。	30 分	○		○					○
	まとめ	・「考える」「伝える」とはどういうことなのかについてまとめ。 ・学習効果を高め、定着させるためには「脳内占有率」を上げることの重要性を説明する（効果的な学習方法）。3コマでは限界があるため、授業外で、一定期間、集中的に活用することを意識する。企業の研修は、実際に考えを活用することが求められている。	10 分	○				○		○	

活用する資料・データ ステークホルダーの協力	■活用する資料 ・事例教材、ワークシート　・P.F.ドラッカー『マネジメント　基本と原則』（ダイヤモンド社） ・NHKテキスト『仕事学のすすめ』柳井正「わがドラッカー流経営論」
備　考	・1コマ目が重要。受講生は「考える」「伝える」ことの重要性はすでに分かった（つもり）になっている。しかし実際は、考えられていない、伝えられていないのが現状である。それを否定するのではなく、なぜできていないのかをしっかりと腹に落として理解させることによって、受講生は主体的に学習する。 ・ビジネス本の単なるおさらいにならないように工夫する。 ・印刷したスライドは最後に配付する。講義中は、メモを取らせ、集中して理解させる。途中、ペアワーク等で相互に理解した内容を伝え合い、確認させるなど、「分かったつもり」に陥らないよう工夫する。受講生に緊張感と集中を持続させる。

授業案　＜２コマ目＞

15 コマの授業案の場合:13 コマ目（→ P10 ～ 11 参照）

タイトル	考えるためのフレームワーク
ねらい	○「考える」とはどのようなことなのかを理解する。 ○課題、情報、現状からどのように「かたまり」を作り、「つながり」を捉えるのかについて理解する。 ○より具体的にフレームワークを理解し、その有効性を実感する。
概　要	○フレームワークとして「ロジックツリー」と「マトリクス」を活用した考え方を学ぶ。 ○単に方法論として理解するのではなく、なぜフレームワークを使って考えると効果的なのかについて実感を持って理解させる。 ○仕事の現場で、実際に活用できるイメージを持たせる。

進行案	学習の流れ		所要時間	1 社会で求められる力の理解	2 大学での学びと社会との関連づけ	3 課題解決プロセスの実践	4 自己成長のための行動	5 学び・経験への意欲	6 変化する社会への関心	7 学習環境の設定	8 他者との協働
	導入	・前回の復習。ペアになって、何も見ずに、前回の内容について説明し合う。 ・脳内占有率を高める重要性の説明と高め方を確認する。 ・「かたまり」と「つながり」について説明する。	10 分				○	○		○	○
	講義＆グループワーク	・「マトリクス」についての基本的な考え方を理解する。 ・グループワーク：事例を通してマトリクスで分類する。（日経トレンディ「今年流行したベストヒット商品」） ・分類軸を3パターン考え、分類軸によって「かたまり」が変わってくることを理解する。 ・3パターンの中で、最適な分類軸を決定し、全体を「一言でいうと何なのか」をグループで考える。 ・最終的に「今年流行した商品の傾向は、○○○○である」とまとめ、グループ毎に発表する。 ・複雑な情報をマトリクスを活用することで、効果的に考えることができることを実感する。	20 分	○		○			○		○
	講義＆グループワーク	・「ロジックツリー」についての基本的な考え方を理解する。 ・グループワーク：事例を使い、ロジックツリーで考えてみる。（「クリスマスのプレゼント」） ・彼女・彼氏へのプレゼントを「モレなく」「ダブリなく」を意識しながら分類をしていく（「かたまり」を作っていく）。 ・最終的に決定したプレゼントをグループ毎に発表する。なぜそのプレゼントに至ったかについて論理的に説明する。 ・複雑な情報をロジックツリーを活用することで、効果的に考えることができることを実感する。	20 分	○		○			○		○
	講義＆グループワーク	・グループワーク：各グループで取組んでいる自社課題を「マトリクス」と「ロジックツリー」を活用し、分析・分類（「かたまり」と「つながり」）する。 ・切り口を変え、2～3パターンで分析・分類し、これまでの課題に対する認識がどのように変わったか（あるいは変わらないか）メンバーで共有する。 ・グループ毎に発表する。 ・最終的に、自社の課題の位置づけを改めて学生とともに確認、認識する。	30 分	○		○			○		○
	まとめ	・「考える」とはどういうことなのか。1コマ、2コマのまとめを行う。 ・ペアワーク：「考える」うえで重要なポイントを説明し合う。 ・フレームワークを活用することで、「かたまり」と「つながり」がより考えやすくなり、論理的に説明できることを確認する。 ・「脳内占有率」を上げ、授業外で一定の期間、集中的に活用するよう意識することで、学習効果が高まり、定着することを伝える。	10 分					○		○	

活用する資料・データ ステークホルダーの協力	■活用する資料 ・事例教材、ワークシート
備　考	・フレームワークは、ビジネス書では難しいイメージがあり、日常場面（仕事の現場）でどのように活用するのか、理解することが難しい。そこで学生と一緒に考えられる身近な事例を取り上げ、活用することの意味、活用してみようと動機づけることが重要。 ・本プログラムでは、若手社員の上司にも授業に参加いただくことが効果的である。若手社員と一緒に受講いただくことで、両者で理解を深められ、本プログラムに若手社員を参加させる意義を実感してもらうことができる。

授業案　＜３コマ目＞

15 コマの授業案の場合:14 コマ目（→ P10 ～ 11 参照）

タイトル	分かりやすく伝える
ねらい	○１コマ目、２コマ目では「考える」に取組んだ。３コマ目では、その考えたことを分かりやすく「伝える」力を身に付けるきっかけとする。 ○分かりやすく「伝える」にはテクニックが必要であると勘違いされやすいが、「伝える」ことは「考える」ことである点をしっかりと理解する。
概　要	○「伝える」ことの基本も、「かたまり」と「つながり」にあること、「伝える」ことと「考える」ことの基本は同じであることを、「伝える」トレーニングをすることで理解させる。 ○分かりやすく「伝える」ための基本である「何を話すか」「どう話すか」を実習を通して理解する。 ○話しことば（音のことば）の特徴を理解する。

進行案	学習の流れ		所要時間	1 社会で求められる力の理解	2 大学での学びと社会との関連づけ	3 課題解決プロセスの実践	4 自己成長のための行動	5 学び・経験への意欲	6 変化する社会への関心	7 学習環境の設定	8 他者との協働
	導入	・分かりやすく「伝える」とはどのようなことなのか。 ・分かりやすく「伝える」ことはなぜ重要なのか。 ・事例を活用し、なぜ伝わらないのかを実感する。 ・「言葉の力」の大きさを実感する。 ・「伝える」こととは「考える」ことであることをしっかり理解する。	15 分	○				○		○	○
	講義＆グループワーク	【基本の理解】 ・代表者が前に出てきて「顔の絵」を説明する。 ・どのように説明すると、1回で、全員が同じ絵を描けるのか、受講生全員で考える。 ・分かりやすく「伝える」ための基本を説明する。 ・より複雑な内容を事例に、分かりやすく「伝える」ための重要な点を段階的に理解していく。 ・ペアワーク：若手社員が、自社について1分間で魅力的に説明する。良かった点、改善点をフィードバックする。 ・「話しことば」は「音のことば」であり、その特徴をしっかりと理解する。	30 分	○				○			○
	講義＆グループワーク	【実践への応用】 ・複雑で、情報量が多い内容を事例として、どのように「伝える」と分かりやすいか、代表が全員の前で話してもらい、改善点を考える。 ・事例を活用して、実習、講義を繰り返すことで、分かりやすく「伝える」ための難易度を上げていき、分かりやすく「伝える」ことができるようになってきていることを実感する。 ・ペアワーク：自宅への経路を説明する。一方に自宅が記された地図を渡し、相手に説明する。（電話により、地図を見せられないという設定） ・どのように説明すれば分かりやすいか、全体で考える。 ・事例の難易度を上げていき、受講生に分かりやすく「伝える」ことができるようになってきていることを実感させる。	30 分	○				○			○
	まとめ	・「考える」「伝える」とはどういうことなのかについてまとめ。 ・「かたまり」と「つながり」が基本であることを確認する。 ・「脳内占有率」を上げ、一定の期間、集中的に活用するよう意識することを確認する。	15 分	○				○	○	○	

活用する資料・データ ステークホルダーの協力	
備　考	・3コマを通して、受講生に理解して欲しい点を明確にし、その点に集中する。定着させるために大事なことを繰り返す。 ・「考える」「伝える」ことはどのようなことであり、その基本は「かたまり」と「つながり」であることを3コマを通して一貫して伝える。 ・定着させるために「脳内占有率」を高めることを繰り返し伝え、実際に高めていたかを確認する。 ・なぜそうなのか、なぜ重要なのか、その意義について丁寧に説明することによって、受講生は実感的に理解（腹落ち）し、主体的な学ぶ姿勢に繋がる。その工夫を全体を通して行う。 ・3コマのみで完璧に身につけさせることは不可能である。大事なことは、3コマを通して、受講生に主体的な姿勢をもたらし、日常で意識し、活用する（脳内占有率を高める）という態度に繋げることにある。その結果として、身につけることを期待する。

合宿形式でのプログラム展開例

４大学が本プログラムを活用した一事例として、学生交流合宿（2泊３日）をご紹介する。通常の授業で行っている内容を限られた時間内で行うには、各大学の実践内容をそのまま展開することは現実的に難しい。そのため合宿版としてアレンジをした内容で実施している。本ハンドブックを活用する際の参考としてご覧いただければ幸いである。

合宿の概要（実績）

●実施期間：2泊３日
●実施場所：
・プログラム実施会場／成城大学（東京都世田谷区）
・宿泊先／国立オリンピック記念青少年総合センター（東京都渋谷区）

<平成27年度 実施概要>
●日時：平成27年９月２日（水）、３日（木）、４日（金）
●参加学生：１年生 計120名
（京都産業大学37名、新潟大学30名、成城大学18名、福岡工業大学35名）

スケジュール

日付	内　容	
1日目	午後	開会式（15:00～）
		コミュニケーションワーク（2 h）
	夜	夕食交流会
2日目	午前	学習プログラム①　（1 h）
		学習プログラム②　（1.5 h）
	午後	学習プログラム③　（1.5 h）
		学習プログラム④　（1.5 h）
	午後～夜	ファイナルセッション準備
3日目	午前	ファイナルセッション
		閉会式（12:00）

テーマ

合宿のテーマは、「主体的な学び」である。同じ１年生同士で、他大学の学生たちと大学生活について様々な観点から話し合うことによって、大学で学ぶ意義とは何なのかを考えさせ、多くのことにチャレンジし、悔いのない主体的な大学生活を送るための強力な動機づけとすることを目的としている。

内容

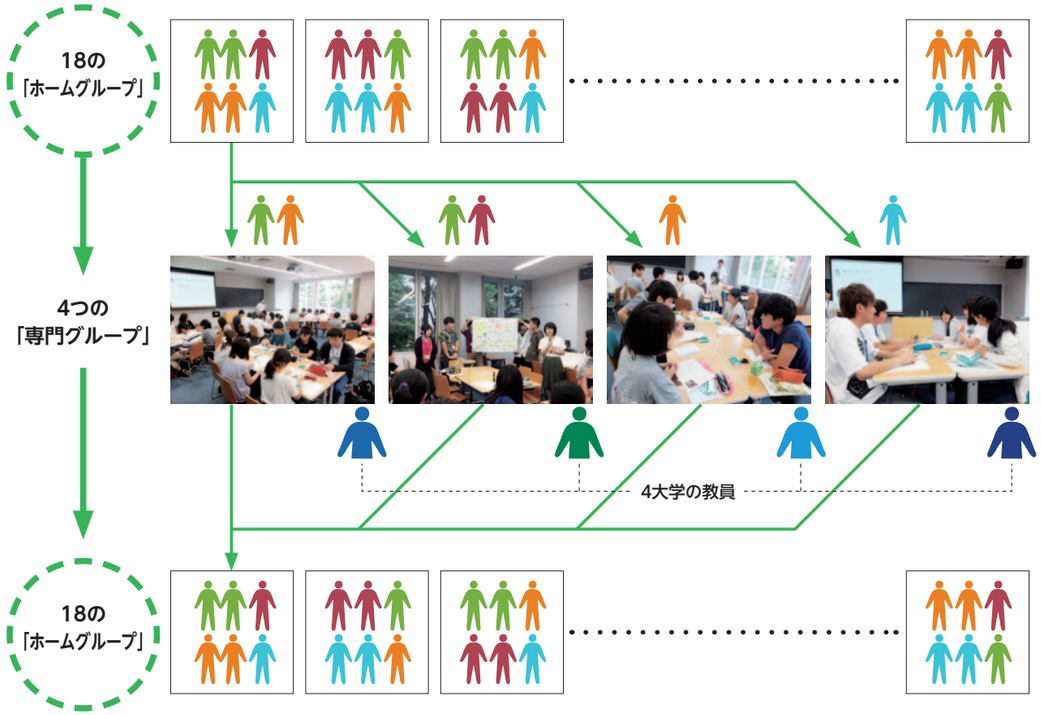
「主体的な学び」を促すために、４大学がそれぞれに強みとしているプログラムを持ち寄り実施。４大学の学生×４大学の教員×４大学の強みによって、相乗効果を最大限に発揮させるために、協同学習による**ジグソー法**という学習理論を用いた。

■ジグソー法

学習課題を複数の下位課題に分け、各学習者は所属グループ（ホームグループ）を離れ、自分が割り当てられた下位課題を専門的（集中的）に学習する集団（専門グループ）で他グループのメンバーと協同で学ぶ。その後、ホームグループに戻り、それぞれが学習した内容を持ち寄って互いに紹介しあい、ジグソーパズルを組み上げるように学習課題の全体像を協力して浮かび上がらせる手法。それぞれが学習した内容は、自分しか詳しく知っている者がいないため、他のメンバーに教える必然性が生じることで教育効果を高める。

学習プログラムの流れ

- 全体で学習テーマ「大学での主体的な学びとは」について説明。協同学習を行ううえでの重要な点として「参加者全員が学習課題（テーマ）への理解を深めることを、参加者全員の目標とする」点を共有する。
- 18の「ホームグループ」を形成。各グループには４大学の学生が混在する。
- ４つの「専門グループ」に分かれ、４大学の教員が提供するテーマ（学習課題の下位課題となる題材）をもとに、大学で主体的に学ぶ意義を考える。



「ホームグループ」に戻り、「専門グループ」で学習した内容をそれぞれが説明し合い、主体的な学びについて議論を深める。議論した内容をグループ発表し、まとめを行う。

合宿形式でのプログラム展開例

「専門グループ」で４大学の教員が実施した内容

＜京都産業大学＞

時間軸と空間軸で大学で学ぶ意義を考える。時間軸としては、戦後 70 年という年であるため、「きけわだつみの声」（岩波文庫）を題材に、今、大学生であることの意味を考える。将来の時間軸としては、国土交通省 2050 年国土展望資料等を題材に、日本がどのような状況になっているかを想定し、今、大学で学ぶ意義を考える。空間軸としては、海外の大学での学び・インターンシップ等の資料を題材に、海外との比較で考える。

＜新潟大学＞

大学、学部、専攻を飛び越え、企業課題に対しチームで取組むことで、変化する社会で必要とされる力として必要な知識、スキルを理解し、習得する。

１コマ目は、自分の強みを理解し、チーム内でシェアード・リーダーシップを発揮する方法論・役割を考え、チームで検討する。２コマ目は、簡易な企業課題にチームで取組み、提案をまとめることで、課題解決プロセスを学び、実践の中で学び合う。

＜成城大学＞

初年次キャリア教育の導入セッション。１コマ目は「歩んできた道（経験）を意味づけ、強みと原動力を探る」。２コマ目は「キャリアビジョンを描く」をテーマに、時間軸（過去・現在・将来）に沿って自分自身を理解する。出身も学習環境（専攻）も異なる４大学の同世代（１年生）が集い、ダイアログとリフレクションを繰り返しながら学び合う。

＜福岡工業大学＞

「大学で学ぶ意義」をメインテーマに据え、それを効果的に考え深めるための手法として議論スキルを教授したうえで、グループディスカッションとクラス全体での共有とを繰り返す。１コマ目には、未来の社会等について話題提供の後、「人生における“時間”」や「限られた時間の中で果たすべき重要な役割（使命）」について議論する。２コマ目には、日頃の大学生活を振り返り、改めて「大学での時間をどう過ごすべきか」を議論し、大学での学びについて個々の考えを深めていく。

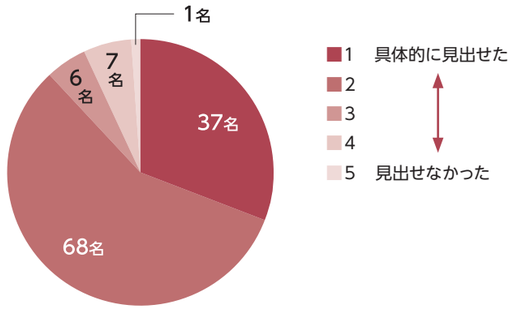
ファイナルセッション

合宿で学んだ成果として、グループでのポスターセッションを行った。テーマは「学生交流合宿の PR ポスターを作成する !!」。全員がプレゼンテーションを行えるようローテーションし、投票により順位づけを行った。

アンケート結果　※回答人数 119 名

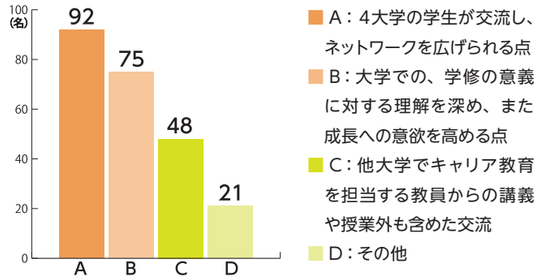
〔質問〕

本プログラムのテーマは「大学で学ぶ意義とは―それぞれにとっての主体的学修について考える―」です。自分なりに大学で学ぶ意義を見出せましたか？



〔質問〕

実際に参加してみて、あなたが、本プログラムの「魅力」と感じることを教えてください。（複数回答可）



学生の声

●自分の学びたい・学ぶべき学問に力を入れることはもちろんのこと、新しいもの・ことに自ら足を踏み入れることが大切だと学びました。自分が本当にしたいことを見つけるには、実際にそれが何かは、その世界に足を踏み入れてみないと実感として感じられないと思いました。遠回りをすることもあると思うけど、興味のある事には挑戦してみようと思いました。４大学との交流によって様々な価値観を得ることができたし、もっと新たな価値観や他大学の先生の授業を全部聞いてみたいと思いました。（京都産業大学／男子）

●自分が思っていた以上に内容の濃い学習ができたのでとても満足しています。他大学の人と交流することしか考えていなかったけど、授業などで大学の意義を考えさせられ、これからの大学生活につながるような学びができました。もちろん、すごく濃い交流もできて満足しかないです。自分の学科のことを勉強するのも大切ですが、今の社会では世界にも目を向けなければならないと思ったので、日本だけでなく外国のことも意識していきたいです。（新潟大学／女子）

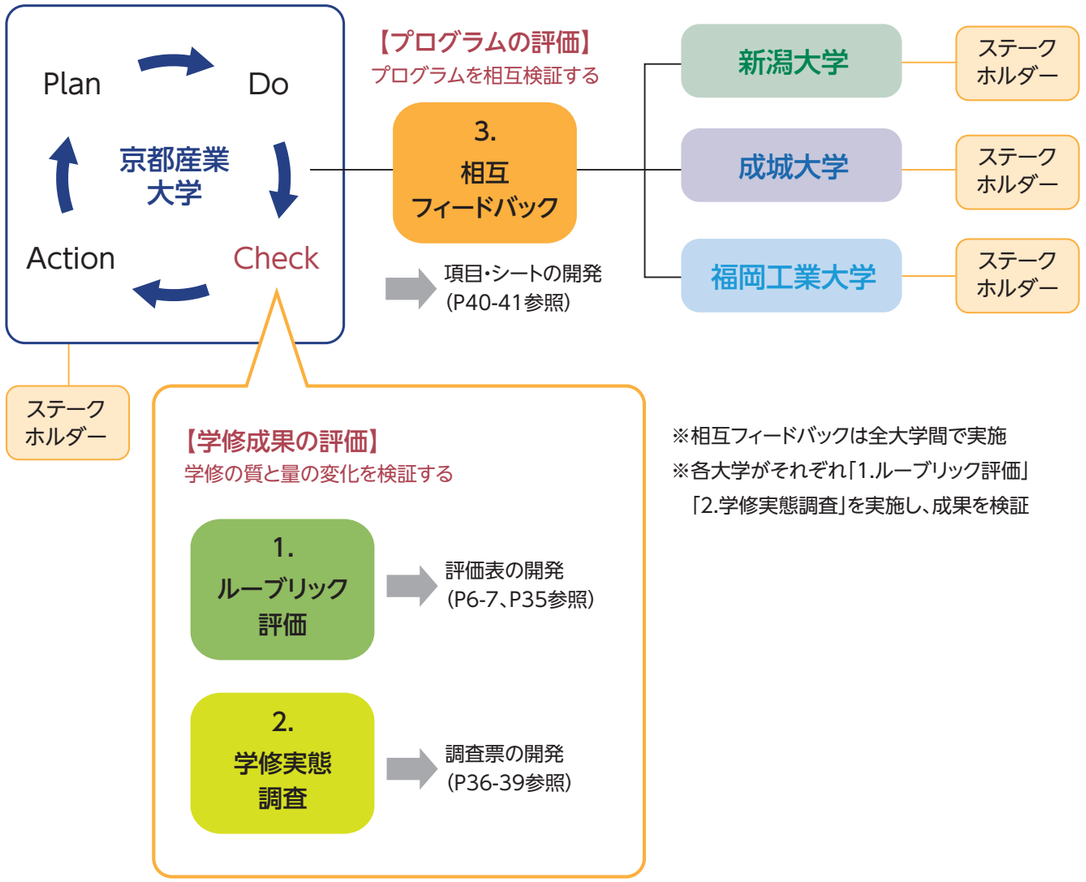
●ただ交流をして友達をつくるだけでなく、グループごとに「大学で学ぶ意義」について話し合ったりするなど意見交換をする場面がとても多く、自分の考え方だけでなく別の考え方を知ることができた。とても多くの人と、ほぼ一日中ディスカッションをする機会が初めてで、最初は自分の意見に自信を持てずに、みんなの意見に圧倒されるばかりでしたが、最終プレゼンの頃には、今回のテーマであった“大学での学び”に対して、自分の意見を持つことができました。（成城大学／女子）

●プログラムの内容の濃さ、それによる各大学生同士の心の開きの早さ、４つの地域の価値観があり、それらを混ぜ合わせたことにより、考え方の多さ、深さを知りえた。クラスは他大学の先生のものだったりして、これから先できるかわからないものだから、すごく面白く、興味深い授業だった。様々なグループワークをすることで、自分にはない価値観などを知ることができ、視野も広がった。他の人の発表などを聞いたりして、刺激を受け、今後のやる気につながった。（福岡工業大学／男子）

評価手法

評価システムの全体像

本事業では、産学協働教育におけるプログラムの検証及び改善を目的とし、点検（Check）プロセスを活性化するためのツール及びシステムの開発を行った。本事業がめざす教育効果は、学生の主体的な学修の確立である。そこで、学修の質と量の両面からその変化を捉えるための汎用的なツールとして「1. ルーブリック評価表」及び「2. 学修実態調査票」を開発した。さらに、学修の質と量の変化の検証も含めてプログラム全体について自己評価するための項目を整理し、かつ、大学間での相互評価やアドバイスに活用できるシートを開発し、これを用いた「3. 相互フィードバック」を考案した。下図は開発した3つのツール及びシステムの関連を示したものである。



※相互フィードバックは全大学間で実施
※各大学がそれぞれ「1.ルーブリック評価」「2.学修実態調査」を実施し、成果を検証

1. ルーブリック評価　産学協働教育プログラムを通じた学生の学びの「プロセス」と「成長」を確認できるとともに、その教育効果を評価するためのツール

2. 学修実態調査　学修の質と量の変化を検証するための汎用的なツール

3. 相互フィードバック　上記の検証を含む、各プログラムの仕組みを大学間で評価するためのツールと方法

■学修成果の評価手法1

ルーブリック評価

P4-5 <産学協働教育で目指す学修成果（アウトカム）>、P6-7 <学修成果（アウトカム）を用いたルーブリック評価表>で掲載した表を再掲する。

それぞれの策定経緯・活用法等の説明については、P4-7 をご参照いただきたい。

目指す学修成果（アウトカム）

1	社会で求められる力の理解	社会で力を発揮できるレベルと自身の現状のレベルを的確に把握している
2	大学での学びと社会との関連づけ	自身の学びを適切に評価し、大学での学びが社会でどのように役立つか意味づけられる
3	課題解決プロセスの実践	未知の課題に取組むために、知識・スキルの獲得・統合・活用のサイクルを回すことができる
4	自己成長のための行動	自らの成長に対して目標を設定し、行動計画をたててコミットメントできる
5	学び・経験への意欲	キャリア形成に対する自分の考え方を明確に意識し、今後の新たな学びや経験への意欲をもっている
6	変化する社会への関心	変化する社会の動向に広く関心を持ち、情報を収集することができる
7	学習環境の設定	必要とする学びに適した学習方法・環境を自分で選びとることができる
8	他者との協働	他者と協働して成果につなげるための方法や考え方を知り、自分の役割・責任を果たすことができる

ルーブリック評価表

No	レベル / 観点	5	4	3	2	1	評定値 <1~5で判定>
		習慣化・継続的にできているレベル	実行・活用できるレベル	なぜか分かる・取組んでいる・行動しようとしているレベル	知っている・関心がある・考えたことがあるレベル	「2」未満	
1	社会で求められる力の理解	社会で求められる知識やスキルに対して、自分の現在の力のレベルがどのくらいなのかを、実体験に基づいて的確に評価・把握している	社会で求められる知識やスキルに対して、自分の現在の力のレベルがどのくらいなのかを、自分なりに評価・把握できる	社会で求められる知識やスキルに対して、自分の現在の力のレベルがどのくらいなのかを理解しようとしている	社会で求められる知識やスキルがどのようなものか考えたことがある	左記に達しない	
2	大学での学びと社会との関連づけ	大学での学びを社会で活かしたり、社会での経験を大学での学びに関連づけたりしながら、継続的に学びを深めている	大学での学びを社会でどのように活かせるのかについて、自分なりに意味づけたり関連づけたりできる	大学での学びが社会でどう役立つかについて、自分なりに理解している	大学での学びの意義や意味について考えたことがある	左記に達しない	
3	課題解決プロセスの実践	大学や社会で、必要に応じて知識やスキルを獲得したり活用しながら、日々の課題解決に取組んでいる	大学や社会で、知識やスキルを活用しながら課題解決に取組むことができる	課題を見出し解決することの必要性や重要性について自分なりに理解している	課題を見出し解決することの必要性や重要性について考えたことがある	左記に達しない	
4	自己成長のための行動	自分が成長するための行動パタンやプロセスについて理解し、実践と内省を繰り返しながら、継続的に自己改善している	自分が成長するための行動パタンやプロセスについて理解し、実践と内省を繰り返しながら自己改善できる	これまでの経験をふまえ、自分が成長するための行動パタンやプロセスについて理解している	自分がどのように成長してきたか、また今後どのように成長していくかについて考えたことがある	左記に達しない	
5	学び・経験への意欲	自分にとって困難な経験を通じて学ぶことの重要性を理解し、そうした学びの機会を自ら見出し取組むことを習慣化している	自分にとって困難な経験を通じて学ぶことの重要性を理解し、そうした学びの機会を自ら見出し挑戦できる	自分にとって困難な経験を通じて何を学んだり得たりできるかを自分なりに理解している	自分にとって困難な経験を通じて学ぶことの重要性について考えたことがある	左記に達しない	
6	変化する社会への関心	社会やその動向に関心を持ち、背景や情報同士のつながりを意識して日頃から情報収集している	社会やその動向に関心を持ち、背景や情報同士のつながりを意識して情報収集ができる	社会やその動向に関心を持ち、自分なりに情報を収集しようとしている	社会やその動向に関心を持ち、情報を収集することの重要性について考えたことがある	左記に達しない	
7	学習環境の設定	学習の内容や求められる成果のレベルに応じて、学習スタイル＊や学習環境を選んだり創意工夫したりしながら効果的に学習を進めている	学習の内容や求められる成果のレベルに応じて、学習スタイル＊や学習環境を選び取ることができる	学習の内容や求められる成果のレベルに応じて、学習スタイル＊を選ぶことがなぜ重要かを理解している	学習の内容や求められる成果のレベルに応じて、学習スタイル＊を選んだことがある	左記に達しない	
8	他者との協働	他者と協働し（目標や責任を共有したうえで協力しながらものごとを進めていくこと）、目指す成果に向けて、他者に働きかけつつ、自分の役割を果たしている	他者と協働し（目標や責任を共有したうえで協力しながらものごとを進めていくこと）、目指す成果に向けて、自分の役割を果たすことができる	他者と協働すること（目標や責任を共有したうえで協力しながらものごとを進めていくこと）の重要性を理解し、そのための人間関係づくりができる	他者と協働すること（目標や責任を共有したうえで協力しながらものごとを進めていくこと）の必要性や重要性について考えたことがある	左記に達しない	

＊この表において、「学習スタイル」とは、例えば、「一人で、主に本や教科書を使って学習する」「他者と集まってそれぞれの学習をする」「他者と集まってディスカッションやグループワークをしたり、一緒に課題に取組む」「学外の学びの場に参加する」「一人で、主にインターネット（スマートフォン等を含む）プログラムなどで学習する」「他者と直接会うのではなく、SNS ツールを通じてディスカッションしたり課題に取組む」といった様々な方法や場所やツールの組み合わせの要素を含む学習のやり方を指す。

■学修成果の評価手法2

学修実態調査

本事業においては、産学協働教育プログラムに参加することによって、学生の主体的学修が促進されたかどうかについて吟味・検証することが必要である。そこで4大学では、学生の学修実態をその主体性も含めて多角的に把握するための調査票を開発した。より汎用的な効果測定ツールを開発することを目指し、4大学で協議、活用、修正を重ねて作成されたものである。具体的には、調査票はフェイスシート及び次の5つの設問から成っている。設問1は「学修スタイル」、設問2は「学修時間とその主体性」、設問3は「主体的学修のきっかけ」、設問4は「アルバイトおよび職場体験（インターンシップ）の経験」、設問5は「（産学協働教育プログラムに参加するうえで確認しておきたい）レディネス」について尋ねる項目である。

大学での学びに関する振り返り調査

回答のお願い

この調査は，大学における教育・支援の改善のために実施されるものです。質問への回答は大学の成績とは全く関係ありません。また，みなさんの回答は統計的に処理されますので，個人的な情報が外部に公開されることはありません。みなさんの考えや気持ちを率直にお答えいただきますようお願いします。

回答に際して

・選択肢の中から該当する数字に〇印をつける回答形式では，数字と数字の間に〇をつけないでください。
・記入もれがないようにお願いします。

回答日：平成　　年　　月　　日

大学名	学部名	学科名
大学	学部	学科

学年	学籍番号	ﾌﾘｶﾞﾅ		性別
年		氏名		男 ・ 女

【調査実施】
文部科学省大学間連携共同教育推進事業「産学協働教育による主体的学修の確立と中核的・中堅職業人の育成」
大学生の学修実態調査ワーキンググループ（新潟大学，成城大学，京都産業大学，福岡工業大学）

1　次ページの表のA～Fには，いろいろな学びのスタイルが書かれています。あなたの**過去６ヶ月間（入学後）**の日頃の学習を思い出しながら，A～Fのそれぞれについて，(1)～(4)の質問に回答してください。なお，**大学の授業に関する学習も関係のない学習も含めて**回答してください。

(1) 頻度…そのスタイルの学習をどのくらいよく（頻繁に）しますか。表中の選択肢のうち，**もっともあてはまる数字１つ**に〇をつけてください。
(2) 理由…そのスタイルで学習をする理由，あるいはしない理由は何ですか。表中の選択肢のうち，**あてはまる数字全て**に〇をつけてください。
(3) 場所…その学習を行う場所はどこですか。表中の選択肢のうち，**あてはまる数字全て**に〇をつけてください。
(4) 主体性…そのときあなたは主体的*に取り組んでいますか。表中の選択肢のうち，**もっともあてはまる数字１つ**に〇をつけてください。

＊「主体的」とは「ある活動や思考などをなす時，その主体となって働きかけるさま。他のものによって導かれるのではなく，自己の純粋な立場において行うさま。」（「広辞苑」より）

※なお，(1)で「全くしない」を選んだ場合は，(3)と(4)は無記入で構いません。

回答は，**過去６ヶ月間（入学後）**のことについて，**次のページの表の中**に記入してください。

		(1)頻度 1つ選んで〇	(2)理由 あてはまる数字全てに〇	(3)場所 あてはまる数字全てに〇	(4)主体性 1つ選んで〇
		1 全くしない　2 ときどきする　3 よくする	1 一緒に学習する人がいないから　2 他の人と集まることができないから　3 集まらなければいけないから　4 誘われたから　5 起きないから　6 一人だとやる気が大きいから　7 効果的に学習できるから　8 学ぶものや得るものが特に必要だと思わないから　9 特に必要だと思わないから	1 自宅あるいは友人宅　2 図書館　3 図書館以外の学内施設　4 カフェやフード店　5 通学の電車やバスの中　6 その他	1 主体的とはいえない　2 どちらでもない　3 主体的に取り組んでいる
A.	**一人で，主に本や教科書を使って学習する** 例）教科書や本を読んで理解したり知識を覚える 一人でインターネットを使って調べる	1 2 3	1 2 選択なし 7 8 9	1 2 3 4 5 6	1 2 3
B.	**他者と集まってそれぞれの学習をする** 例）友だちと話しながらレポートを書く 分からないところを聞き合いながら課題に取り組む	1 2 3	1 2 3 4 5 6 7 8 9	1 2 3 4 5 6	1 2 3
C.	**他者と集まってディスカッションやグループワークをしたり，一緒に課題に取り組む** 例）授業やゼミで出された課題についてのディスカッションや作業をする	1 2 3	1 2 3 4 5 6 7 8 9	1 2 3 4 5 6	1 2 3
D.	**学外の学びの場に参加する** 例）資格や語学の講座を受ける，フォーラムや講演会や学会に参加する	1 2 3	1 2 3 4 5 6 7 8 9	場所を記入 （　　）	1 2 3
E.	**一人で，主にインターネット（スマートフォン等を含む）のプログラムなどで学習する** 例）YouTube で講義を視聴する，英語教材のアプリケーションで勉強する	1 2 3	1 2 選択なし 5 6 7 8 9	1 2 3 4 5 6	1 2 3
F.	**他者と直接会うのではなく，SNSツール＊を通じてディスカッションをしたり課題に取り組む** 例）ラインでやりとりしながらレポートを書いたり課題を行う	1 2 3	1 2 3 4 5 6 7 8 9	1 2 3 4 5 6	1 2 3

＊「SNSツール」とは，例えばツイッター，ライン，フェイスブック，スカイプ等。

※(1)頻度で「全くしない」を選んだ場合は、(3)場所と(4)主体性について回答する必要はありません。

2　**過去６ヶ月間（入学後）**の大学内外での学びについて，(1)～(3)に回答してください。

(1) あなたが以下のA～Cの学習に費やす時間は**１週間あたり合計で**どのくらいですか。
授業が行われている典型的な１週間について，**あてはまる数字１つ**に〇をつけてください。

		全くない	1時間未満	1～2時間	3～5時間	6～10時間	11～15時間	16～20時間	21時間以上
A.	大学の授業関連のレポート・課題・予習・復習 ※授業（講義・実験）時間**以外**でお考えください	1	2	3	4	5	6	7	8
B.	資格取得や語学等の検定試験のための学習	1	2	3	4	5	6	7	8
C.	AとB以外の学習で，興味・関心のあることについて本やインターネットで調べたり，教養のための読書をする	1	2	3	4	5	6	7	8

(2) 下の表のA～Mの中から，学習するときのあなたの気持ちとして**もっともあてはまるものから順に３つ選んで**，以下に記号を書いてください。

1番目＿＿＿＿　　2番目＿＿＿＿　　3番目＿＿＿＿

A.	周りの友だちもしているので自分もやろう	H.	問題解決力や論理的思考力を身につけたい
B.	あまり深く考えずに「なんとなく」	I.	表現力やプレゼンテーションの力を身につけたい
C.	単位を取るため，卒業するため	J.	社会で生きていくために必要な知恵や考え方を身につけたい
D.	授業やゼミで満足のいく発表をしたり成果を出したい	K.	人生や生き方について考えを広めたり深めたい
E.	興味・関心があることをもっと深く理解したり詳しく知りたい	L.	仕事に必要な知識や技能を身につけたい
F	幅広い知識や教養を身につけたい	M.	資格・免許を取得したい
G.	専門的な知識を身につけたい		

(3) あなたが行う全ての学習時間を 100%とすると，あなたにとって「主体的*な学習」は何%くらいですか。0〜100%の選択肢の中から，**もっともあてはまる数字１つ**に〇をつけてください。

0 --------- 10 --------- 20 --------- 30 --------- 40 --------- 50 --------- 60 --------- 70 --------- 80 --------- 90 --------- 100 %

＊「主体的」とは「ある活動や思考などをなす時，その主体となって働きかけるさま。他のものによって導かれるのではなく，自己の純粋な立場において行うさま。」（「広辞苑」より）

次のページに続きます

3 **大学に入学してから今まで**に，学習しよう（例：「勉強しないといけない」「勉強してみたい」）と思ったときのことについてお聞きします。下の表のA〜Qのようなことが**きっかけ**となって，学習しようと思ったことがありますか。
表中の選択肢のうち，もっとも当てはまる数字１つに〇をつけてください。

		全くあてはまらない	あまりあてはまらない	少しあてはまる	わりとあてはまる	非常にあてはまる
A.	専門や教養の授業を受けて，学習しようと思った	1	2	3	4	5
B.	キャリア教育科目系の授業を受けて，学習しようと思った	1	2	3	4	5
C.	先生や先輩・友人・家族と話していて，学習しようと思った	1	2	3	4	5
D.	本や新聞・雑誌を読んだりテレビを見て，学習しようと思った	1	2	3	4	5
E.	ツイッターやブロクなどを読んで，学習しようと思った	1	2	3	4	5
F.	単位取得や試験が難しいということを聞いて，学習しようと思った	1	2	3	4	5
G.	就職の厳しい現状を聞いて，学習しようと思った	1	2	3	4	5
H.	授業やゼミで課題や発表に取り組んで，「もっとやれる」「もっとやりたい」と思い，学習しようと思った	1	2	3	4	5
I.	試験に合格したり良い成績を取り，学習しようと思った	1	2	3	4	5
J.	他の人が上手に発表したり良いレポートを書いているのを見て，学習しようと思った	1	2	3	4	5
K.	授業やゼミの課題や発表で，失敗したり思うようにいかず，学習しようと思った	1	2	3	4	5
L.	試験で悪い点を取って，学習しようと思った	1	2	3	4	5
M.	仕事や職業について話を聞いたり，「このような人になりたい」と思える社会人に出会って，学習しようと思った	1	2	3	4	5
N.	企業の人の話を聞いたり，働いている身近な大人を見て自分の未熟さに気づき，学習しようと思った	1	2	3	4	5
O.	職場体験（インターンシップ）に参加して，学習しようと思った	1	2	3	4	5
P.	PBL（課題解決型学習）型の授業・プログラムや活動に参加して，学習しようと思った	1	2	3	4	5
Q.	課外活動（ボランティアやサークル）に参加して，学習しようと思った	1	2	3	4	5
R.	将来やりたいことや目標を見つけて，学習しようと思った	1	2	3	4	5

4 **大学に入学してから今まで**の「アルバイト」および「職場体験（インターンシップ）」の経験について教えてください。

(1) アルバイトの経験はありますか。ある場合，期間はどのくらいですか。

A． 経験の有無： ある ・ ない （いずれかに〇をつける）

B． 約＿＿＿＿年＿＿＿＿ヶ月間

（週に＿＿＿＿日程度勤務 ＊複数ある場合は平均を記入してください）

(2) 職場体験（インターンシップ）の経験はありますか。ある場合，時期と期間を教えてください。

A． 経験の有無： ある ・ ない （いずれかに〇をつける）

B． 時期：＿＿＿＿年次の＿＿＿＿月頃

C． 期間：約＿＿＿＿週間

5 **現在のあなたの考えや行動**について，もっとも当てはまる数字１つに〇をつけてください。

		全くあてはまらない	あまりあてはまらない	少しあてはまる	わりとあてはまる	非常にあてはまる
A.	大学で学ぶ目的や意義に関して，自分なりの考えを持っている	1	2	3	4	5
B.	自分自身の将来設計について見通しがある	1	2	3	4	5
C.	グループディスカッションの場や授業で，意見を言ったり質問をしたりする	1	2	3	4	5
D.	グループディスカッションの場や授業で，意見を言ったり質問をしたりすることの意義について理解している	1	2	3	4	5
E.	価値観や考え方の異なる人と関わるようにしている	1	2	3	4	5

ご協力ありがとうございました

■プログラム評価の手法

相互フィードバック

4大学では、各大学の産学協働教育プログラムの質保証ならびに質的向上に向けた改善のため、大学間のプログラムの相互フィードバックに取組んでいる。評価のための項目は、カナダ・コーオプ教育協会（CAFCE）により 2006 年に制定された認証基準 “CAFCE Standards and Rationales” (http://www.cafce.ca/_Library/_documents/AC-ESR07.pdf）の基準を参考にしつつ、「主体的学修を促す具体的な工夫や仕掛けはあるか」等、本事業が主眼を置く「主体的学修」に関する項目を取り入れて作成した。なお、ここでは項目のみを紹介するが、本取組では、その方法（手順及びワークシート）を併せて開発した。各大学は対象プログラムについて、事前にこれらの項目への自己評価を記入して他の3大学に送付しておき、相互フィードバックの当日は、項目に沿って簡潔に説明を行った後、フィードバック及びディスカッションを行う。各大学はこのプロセスで得られたアイディアを次期のプログラムの設計や運営の改善へと活かしている。

項目	観点の例
実施目的・教育的効果の定義	■目指す教育的効果が一般的・抽象的ではなく、達成度・実現度が評価可能な形で、具体的・明確に定義されているか。 ■大学の教育方針（アドミッションポリシー・カリキュラムポリシー・ディプロマポリシー）や教育理念に対して、位置づけられているか。 ■産業界が各大学に求めるニーズを踏まえて実施目的・教育的効果を設定できているか。 ■実施目的を明文化し、学内・企業・学生等とコミュニケーションをとっているか。 ■量的拡大や質的向上を含めた中長期の展開方針や目標数値、そしてそれらの実現に向けたシナリオやステップが描けているかどうか。
産学協働教育ならではの目標とその実現に向けた工夫・取組	■教室内の講義では得られない産学協働ならではの教育的効果を実現しているか。 ■本プログラムの実施が、産学協働の更なる推進・深化につながっているか。 ■企業の置かれている状況や課題、ニーズを踏まえながら、企業にとっても価値（メリットとコストのバランス）ある内容を提案し、実現できているか。 ■学生・企業双方が主体的に取組む関係性を作れているか。 ■企業が学生にメンターやスーパーバイザーとして適切に関与する関係性が設計・構築されているか。 ■その他、企業側が適切な受入環境を整備するために必要な支援や助言を行っているか。

項目	観点の例
プログラム設計	■プログラムが全体として、対象とする学生像、実施目的、目指す教育的効果に照らして適切に設計されているかどうか。 ■目標設定、マインドセット、スキル研修、知識の獲得など事前学習の時期・内容・頻度は適切か。 ■期間中のモニタリングやフィードバック、フォローが、教育的効果を高めるために適切な時期・内容・頻度で用意されているか。 ■事後学習が、事前に設定した成長目標、成果目標に対する自己評価および企業からの評価・フィードバックも踏まえながら、経験の意味づけや内省、今後の学習やキャリアにおける目標設定と行動計画立案を促していくような内容か。 ■主体的学修を促す具体的な工夫や仕掛けはあるか。またそれは効果的か。 ■他の受講者と高め合い、励まし合い、支え合う関係ができているかどうか。
評価に基づく継続的改善の実施	■当初設定した目的・目標に照らし合わせ、教育的効果の測定が適切な方法で行われているか。 ■事前に設定した成長目標、成果目標の達成度合いや、企業からのフィードバックも踏まえながら、プログラム全体の評価・振り返りを行い、次年度以降の改善につなげていく PDCA の仕組みがあるか。
専門人材を中心とした実施・運営体制	■マネジメントから計画、実行までトータルに責任を持つ専門人員を中心としたチームが、適切な人員により組成されているか。 ■専門人材の位置づけや役割を明確にし、産学協働教育の推進役として計画的・持続的な採用・配置・育成に取組んでいるか。 ■産学協働教育の実施状況や課題・可能性について、大学のマネジメント層と共有・議論する機会を設け、学内を巻き込んだ量的・質的な改善の動きにつなげているかどうか。 ■教員（学部・学科）や職員（キャリアセンター、産学連携部門等）など、学内の関係部門との連携・協働が適切に行われているか。また、必要に応じて学外の専門家との協働および連携がなされているか。 ■書式やガイダンスなどの可能な限りの共通化や、実施規模に応じた IT 活用など、業務効率を高める工夫がなされているかどうか。

平成 24 年度 文部科学省 大学間連携共同教育推進事業
「産学協働教育による主体的学修の確立と中核的・中堅職業人の育成」

主体的学修を促す
産学協働教育プログラム
ハンドブック

平成 28 年 2 月　発行

【発　　行】　京都産業大学・新潟大学・成城大学・福岡工業大学
【編　　集】　プログラム共同開発 主担当校／新潟大学
（編集担当／教育・学生支援機構キャリアセンター　高澤陽二郎）
【お問合せ】　事務局（京都産業大学コーオプ教育研究開発センター）
ＴＥＬ：075-705-1754
ＦＡＸ：075-705-1939
メール：career-daigakukan-renkei@star.kyoto-su.ac.jp

このハンドブックの内容に関して、活用のご相談等ありましたら上記までお問合せ下さい。